5．地方別に見た校外学習の特色

地方別の比較を通して

以上見てきたように、５年生では林間学校を中心とする野外活動、６年生では修学旅行、というのが、宿泊をともなう校外学習の基本的な構図であった。

しかし、これらのデータは、それぞれの学校がもつ様々な条件を捨象しているので、あくまで全体的な傾向を示すにとどまる。校外学習の実施をめぐって今後に望まれる対応のひとつは、おそらく地域や子どもたちの実情に応じて、それぞれの学校がどれだけ個性的なプログラムを開発するかという点にあろう。

そうした観点から、以下の章では、クロス集計の結果を中心に報告する。

まず、図21から図24は、行き先・期間・施設・費用という校外学習の基本的な条件について、地方別に比較したものである。いずれの図においても、上段が５年生、下段が６年生のデータとなっている。

まず図21では、行き先を「市町村内」「県内」「県外」に３等分して地方別に比較した。

全体として、５年生では「県内」、６年生では「県外」という移動パターンを示している中で、北海道と関東・近畿にそれと異なる傾向が読み取れる。

北海道では、５年生が「市町村内」、６年生が「県（道）内」となっている。これは移動距離やかかる費用、そして周囲にある自然環境などの点から考えて、当然の結果といえよう。

これに対して、関東や近畿では、５年生・

6年生ともに「県外」に場所を求めている。これも、それらの地方を取り巻く諸条件を考えれば、納得できる結果である。その結果がかかる費用にはねかえることになろうが、その点についてはあらためてふれることにする。

次に図22から、校外学習の期間を比較してみよう。

図の下段、6年生の結果では、いずれの地方も共通して1泊2日が主流になっている。

これに対して5年生では、北海道と北陸を除く他の地方において、1泊2日と2泊3日にほぼ二分されている。

期間が長くなれば、それだけ多彩なプログラムが組める。反面、それにかかる費用や学校側の労力はかなりかさむことになる。その両者にどう折り合いをつけるか。その点に関する一定の方向が定まるのは、もう少し先のことなのかもしれない。

費用に関する限り、多人数でも宿泊できる公営施設があると好都合である。その点を確かめようとしたのが、次の図23である。

それによると、全体としては、5年生が公営施設、6年生が民間の施設(ホテルや旅館)をそれぞれ利用している。

その中で、関東と近畿においては、5年生でも民間の施設を利用する割合が高いことが示されている。この2つの地方はすでに見てきたように、5年生でも県外に出かける割合が高かった。そうした場合にも利用できる公営施設を整備することを望むのは、現状では無理なのであろうか。

以上見てきた行き先・期間・施設の3つの要素は、つまるところそれにともなう費用の問題に行きつくのであろう。

無償を原則とする義務教育においては、多額な出費を保護者に求めるのはためらわれる。その意味では、学校教育の一環として行われる校外学習は、自ずと一定の範囲内に制約されるのかもしれない。

しかし、現代の子どもたちに豊かな体験の場を提供するために、学校もまたその役割の一端を担う必要があるのだろう。

そう考えれば、少ない予算の中でどれだけ豊かなプログラムを子どもたちに提供できるか。その点が、学校としての腕の見せどころといえるのかもしれない。

図24には、一人あたりの費用を地方別にまとめてある。

ここでは、それぞれに様々な事情があることを考慮して、次の点を指摘するにとどめたい。最も少ない費用で校外学習を実施しているのが北陸の学校、そして逆にかなり多額の費用をかけているのが関東と近畿の学校である。

なお、ここまでは項目ごとに比較をしてきたせいもあって、地方ごとのプロフィールが具体的につかみにくいきらいがある。そこで、念のために図25と図26には、4つの項目について地方別に整理してみた。ここでは、それぞれの項目ごとに最頻値を取り出してプロフィールを描いたが、これまでに指摘した結果と照合させながらお読み取りいただきたい。

図21　行き先（地方別）

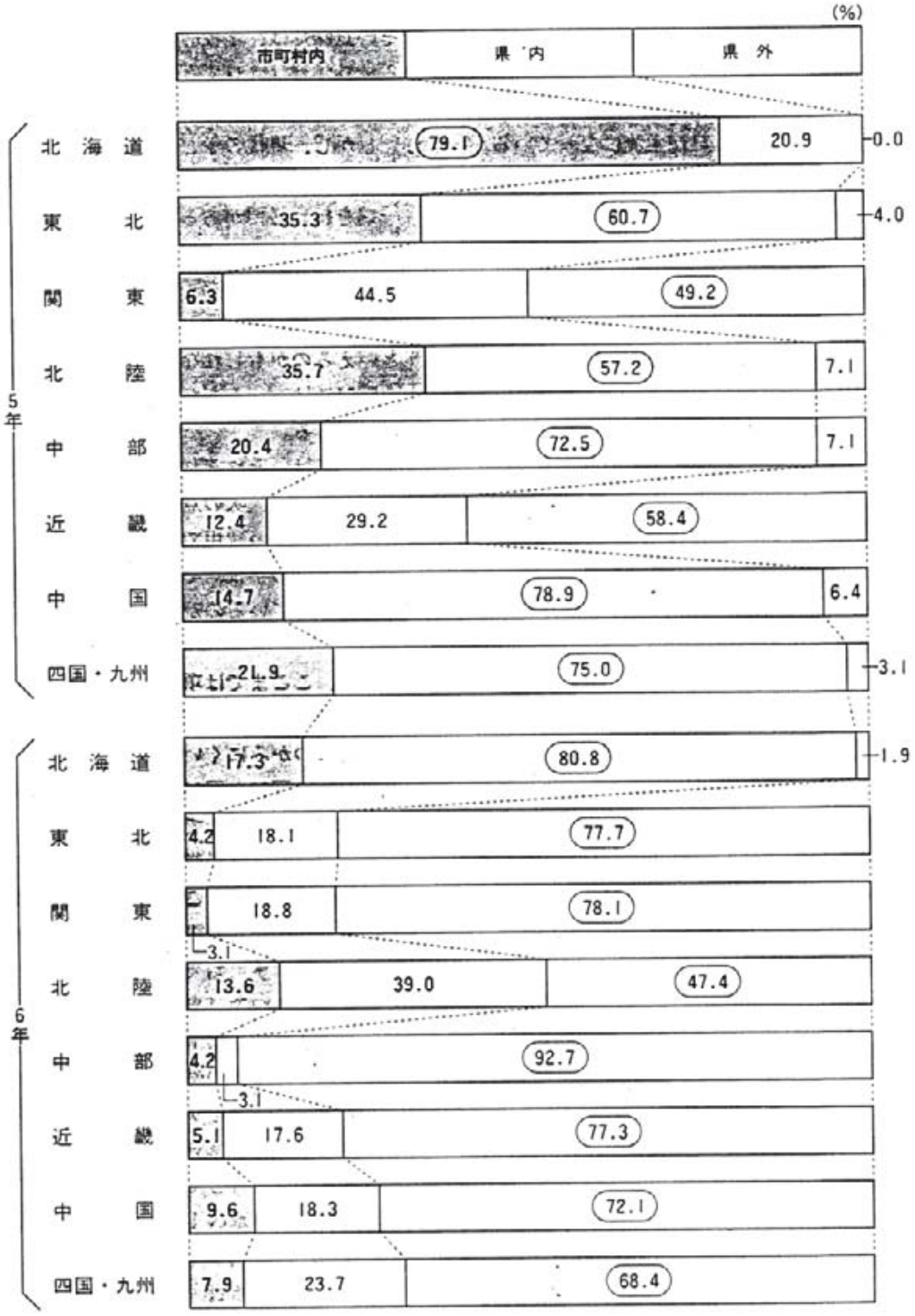

(%)
市町村内
県内
県外
5年
北海道
79.1
20.9
0.0
東北
35.3
60.7
4.0
関東
6.3
44.5
49.2
北陸
35.7
57.2
7.1
中部
20.4
72.5
7.1
近畿
12.4
29.2
58.4
中国
14.7
78.9
6.4
四国・九州
24.9
75.0
3.1
6年
北海道
17.3
80.8
1.9
東北
4.2
18.1
77.7
関東
18.8
78.1
3.1
北陸
13.6
39.0
47.4
中部
4.2
92.7
3.1
近畿
5.1
17.6
77.3
中国
9.6
18.3
72.1
四国・九州
7.9
23.7
68.4

図22　校外学習の期間（地方別）

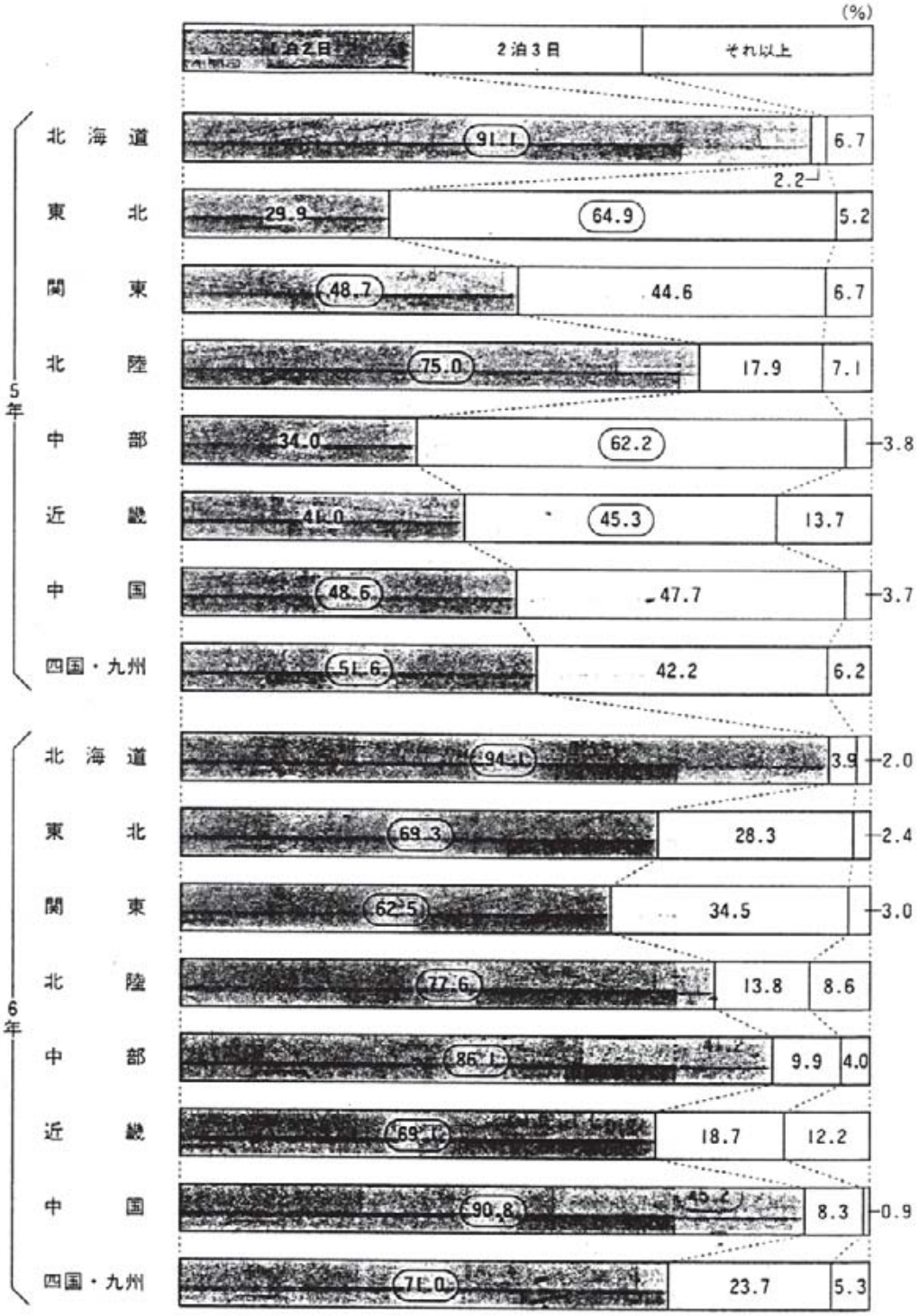


図23　利用する施設(地方別)

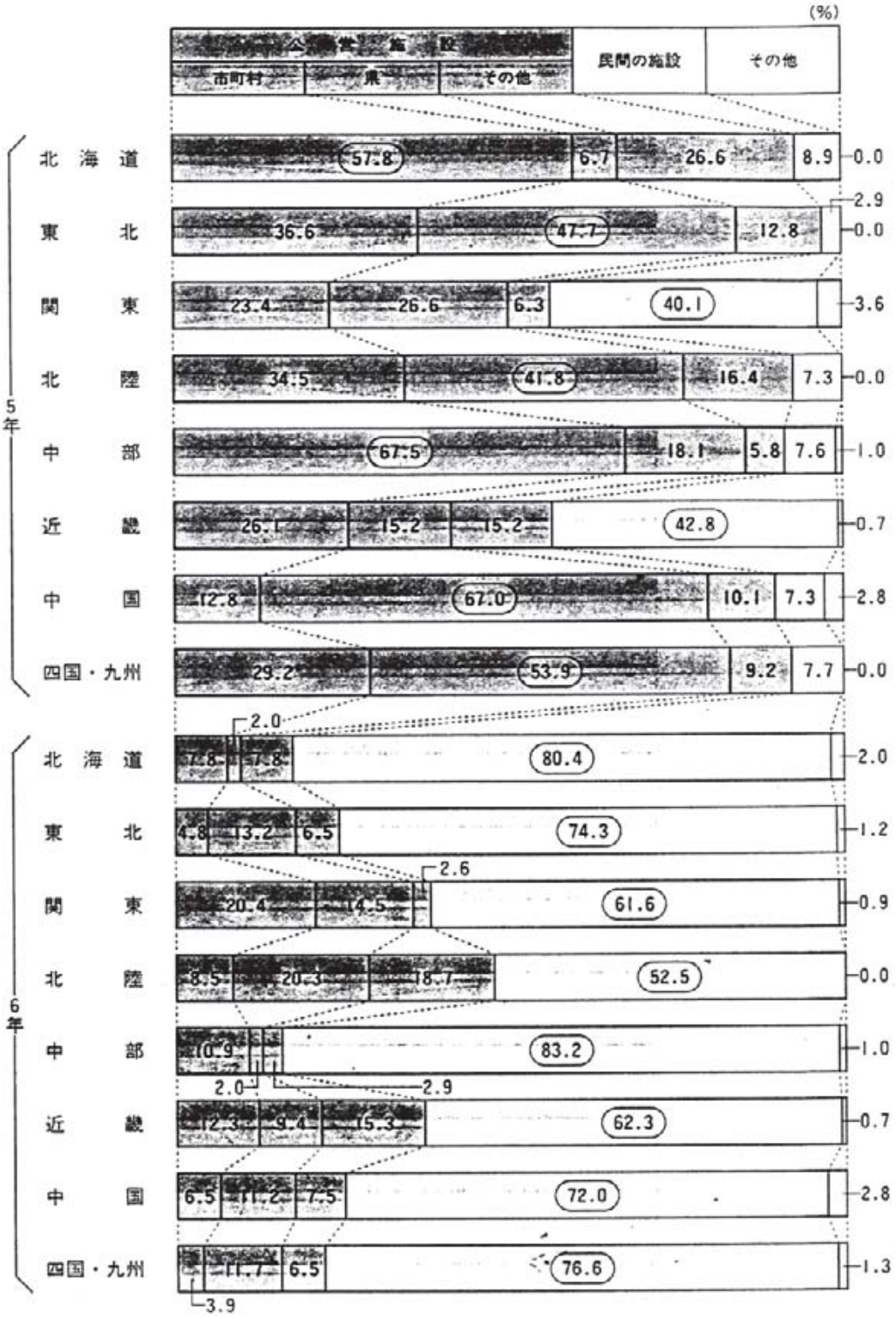


図24　一人あたりの費用（地方別）

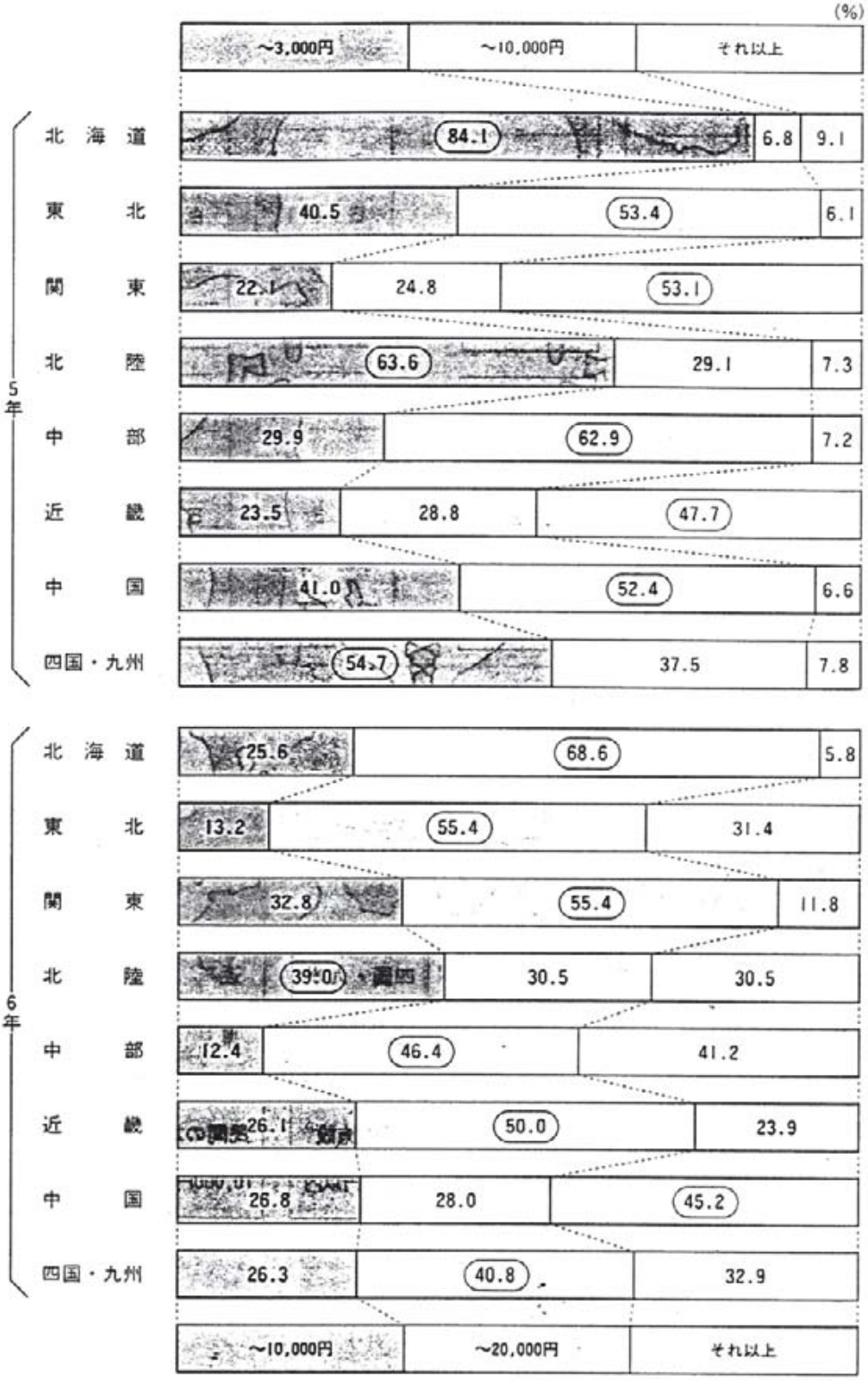


図25　校外学習の地方別プロフィール（５年）

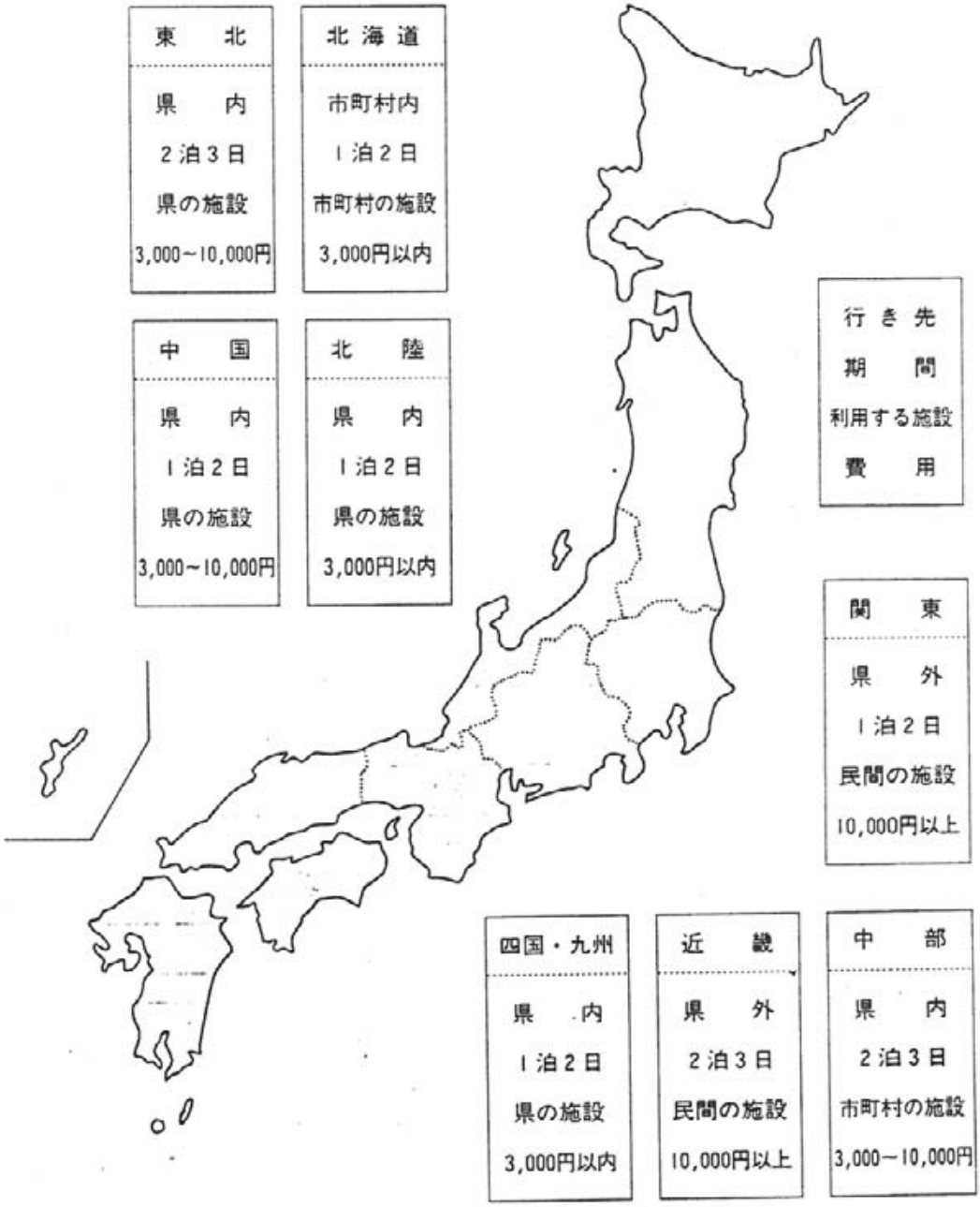
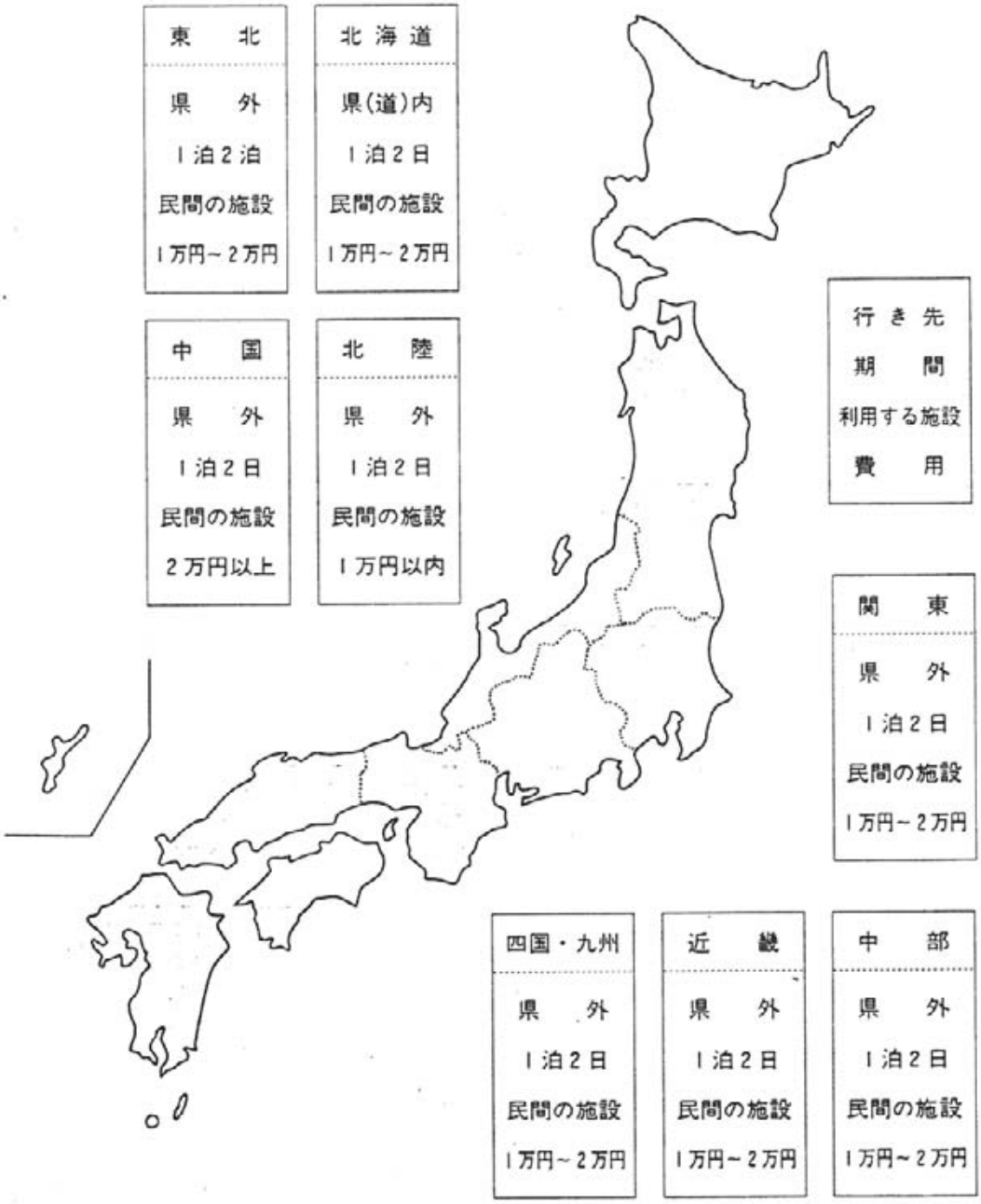


図26　校外学習の地方別プロフィール(6年)



地方別に見たプログラムの特徴

それでは、プログラムの内容に関して、地方別にどんな特色が見られるのであろうか。表10と表11を手がかりにして、その点を分析してみたい。

表10　地方別に見たプログラムの特徴（5年）

	30	40	50 (%)
北海道		ハイキング 星座の観察 オリエンテーリング きもだめし	キャンプファイヤー 野外炊事
東北	星座の観察 フィールドワーク		キャンプファイヤー ハイキング 野外炊事 オリエンテーリング
関東	星座の観察	野外炊事 オリエンテーリング	キャンプファイヤー ハイキング
北陸	ハイキング		キャンプファイヤー 野外炊事 オリエンテーリング
中部	星座の観察	オリエンテーリング アスレチック 工作 きもだめし	キャンプファイヤー ハイキング 野外炊事
近畿	フィールドワーク	オリエンテーリング	キャンプファイヤー ハイキング 野外炊事 星座の観察
中国	ハイキング 野外炊事 博物館・美術館の見学		キャンプファイヤー
四国・九州	星座の観察	ハイキング	キャンプファイヤー 野外炊事 オリエンテーリング

この2つの表は、いずれも個々の項目の実施率をもとにして作成してある。右端の欄は、実施率が50%を超える項目、以下、10%を単位にして、30%台までの3ランクに分けて表示した。

まず、表10に示した5年生の結果では、いずれの地方においても「キャンプファイヤー」「野外炊事」「ハイキング」などが行われていることが読み取れる。

ここまで読み取ってきた行き先や費用などの諸条件にはかなりの差が認められた。にもかかわらず、実施しているプログラムの内容は、極めて類似している。もっとも、こうした量的な処理の中では、個性的なプログラム

表11　地方別に見たプログラムの特徴（6年）

	30	40	50 (%)
北海道	ケーブルカー	史跡めぐり	博物館・美術館の見学
東北	遊園地・動物園		博物館・美術館の見学 史跡めぐり
関東	キャンプファイヤー ハイキング	博物館・美術館の見学	史跡めぐり
北陸	キャンプファイヤー ハイキング 野外炊事 オリエンテーリング	博物館・美術館の見学	史跡めぐり
中部	遊園地・動物園		博物館・美術館の見学 史跡めぐり
近畿	キャンプファイヤー	ハイキング 野外炊事	星座の観察 オリエンテーリング 博物館・美術館の見学 史跡めぐり
中国	博物館・美術館の見学 遊園地・動物園		史跡めぐり
四国・九州		遊園地・動物園	博物館・美術館の見学 史跡めぐり

を実施している学校は捨象されてしまうのかもしれない。

表11に示した6年生の結果でも、「史跡めぐり」と「博物館・美術館の見学」が定番となっている。

その中で唯一、近畿の学校が異なる傾向を示している。ここでは、「星座の観察」や「オリエンテーリング」「ハイキング」「野外炊事」などが、かなりの高率で実施されている。幾分その割合は低いものの、関東や北陸の学校にも、その傾向が認められる。

この内容は、主として5年生で実施されていた野外活動の内容である。

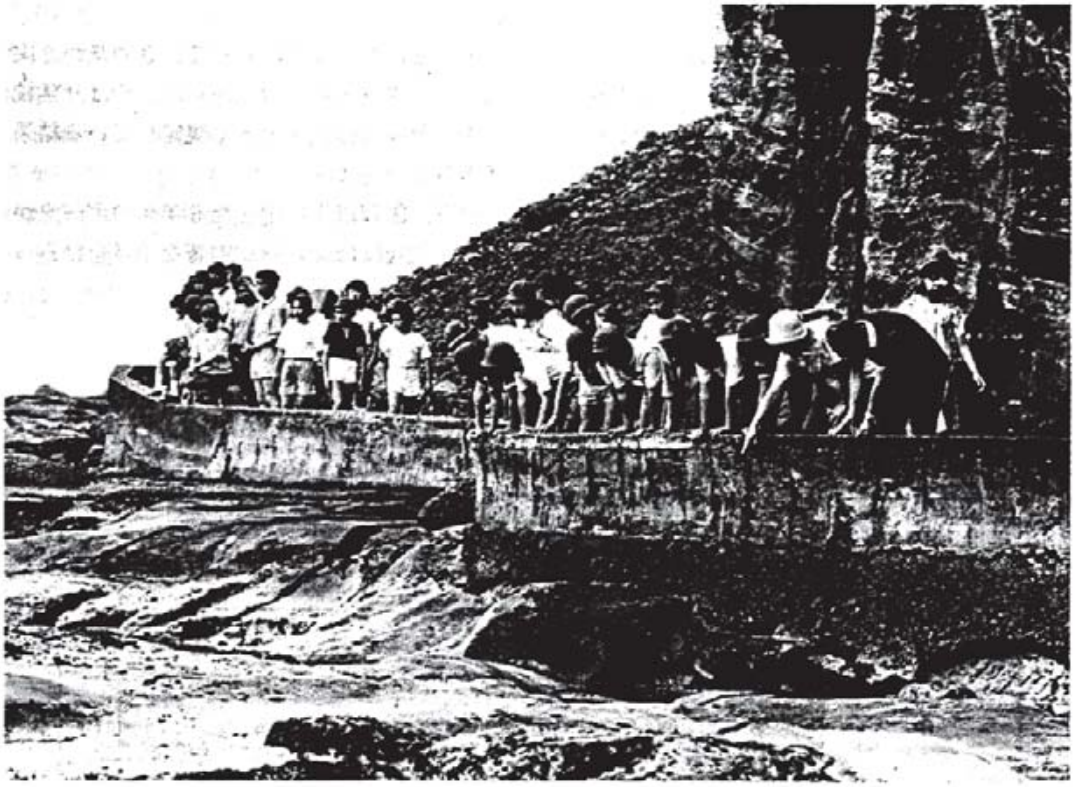
考えてみれば、5年生で林間学校、6年生で修学旅行という順序性には、それほど確かな教育的根拠があるわけではないのだろう。仲間との接触や集団生活の質からみれば、案外5年生向けに用意されているプログラムのほうがレベルが高いという気もしないでもない。

加えて、冒頭でも述べたように、「旅行的行事」から「集団宿泊的行事」へと、指導要領の文言も変更されたという事情もある。

これらを総合して考えるならば、近畿の学校を中心にした動向には注目する必要があろう。

質の異なるプログラムを2種類用意することにも意味がないわけではない。しかし、同質のプログラムの中で、学年に応じた課題を段階を追って提示していく。そこに、校外学習におけるカリキュラム化の可能性を感じることができると思うのだが。

6．校外学習の実施をめぐって



学校規模と校外学習

校外学習の実施をめぐっては、学校のもつ諸条件のうち、特に学校規模がその内容を強く規定していることが予想される。

例えば、学年全体の子どもの数が100名程度であれば、現地までの交通手段や宿泊施設もいくつもの選択肢が用意できる。さらに、現地でのプログラムも弾力的で多彩なものを組むことができる。

これに対して、学校規模が大きくなればなるほど、選択肢の数が自ずと限定され、現地での活動にも管理と統制が強まるのは止むを得ないところである。

そうした事情を考慮し、本章では、まず学校規模との関連をとらえてみることにしたい。

以下に示すデータは、これまで見てきた校外学習の期間や費用、施設などについて、学校の規模別に整理したものである。なお、ここでいう学校規模は、児童数を手がかりにして、サンプルの全体がほぼ3等分されるように分けてある。児童数で示すならば、「大規模校」はほぼ学年児童数150名以上の学校、そして「小規模校」は80名以下の学校、とお考えいただきたい。

さて、5年生の校外学習に関して、まず期間と実施回数を調べてみよう。

図27では、小規模校では1泊2日が、大規模校では2泊3日が過半数を占めていることがわかる。そして、図28では、わずかながら小規模校において年間2回実施する学校があることがわかる。

対照的に表現すれば、大規模校では「長く少なく」、小規模校では「短く多く」というのがデータが示す動向である。

図29に示した行き先選定の時期に関するデータからは、小規模校が比較的新しい場所を求め始めていることがわかる。選択可能という条件の中で、ねらいや活動の内容によりフィットした場所を選ぶことができるのであろう。

そして、小規模校では費用もそれほど多額を必要とせず、主として県の施設を利用していることが、以下の図から読み取れる（図30、図31）。

子どもたちの実態に対して、きめ細かく柔軟に対応するという観点からは、やはり学校規模がその可能性を大きく規定している結果であるといえよう。

一方、図32以下に示した6年生のデータから、学校規模による差が顕著な項目をひろってみよう。

図27　期間×学校規模（5年）

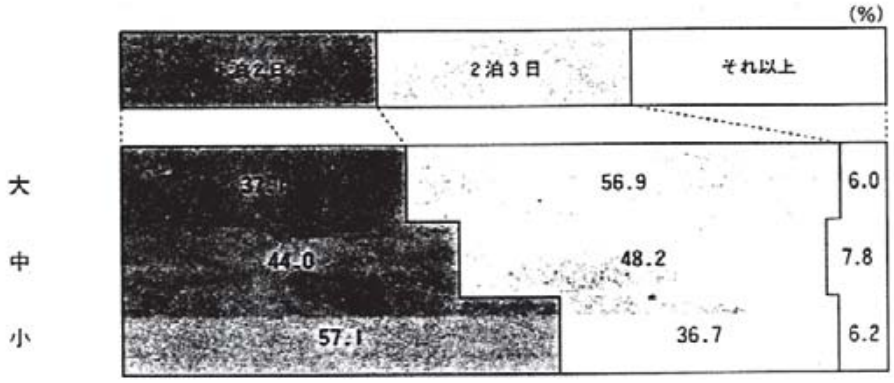
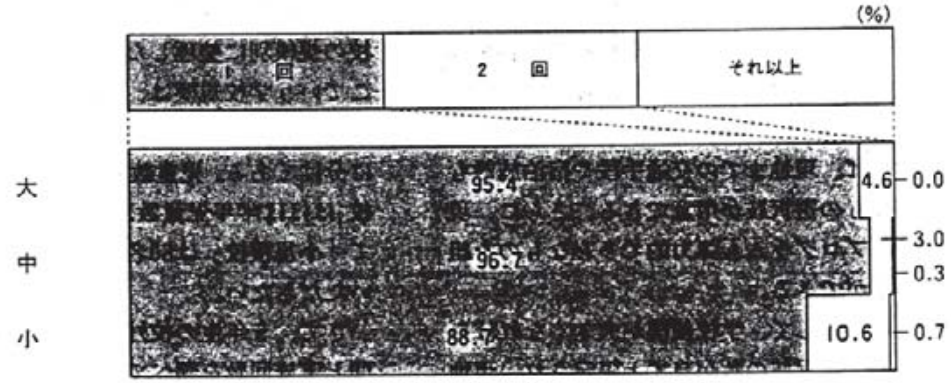


図28　実施回数×学校規模（5年）



まず、5年生の場合以上に、実施回数においては差が拡大している。そして、やはり小規模校では、行き先の選定にあたっても柔軟な対応が読み取れる。さらに、公営施設の利用率においても、一定程度の差が認められる。

6年生の校外学習では、県外に場所を求めるケースが大半であった。その場合の移動手段は貸し切りバスが中心となろうが、バス借り上げに必要な一人あたりの負担額は小規模校ほど大きい。そのあたりの事情が、図35に示されている。

いずれにしても、学校の規模に応じて、どれだけ有効な校外学習を計画するかが、今後に残された大きな課題であるといえよう。

なお、念のためにつけ加えるならば、学校規模による活動内容（プログラム）の差は、ほとんど認められなかった。今後に検討を要するもうひとつの課題である。

図29　行き先選定の時期×学校規模（5年）

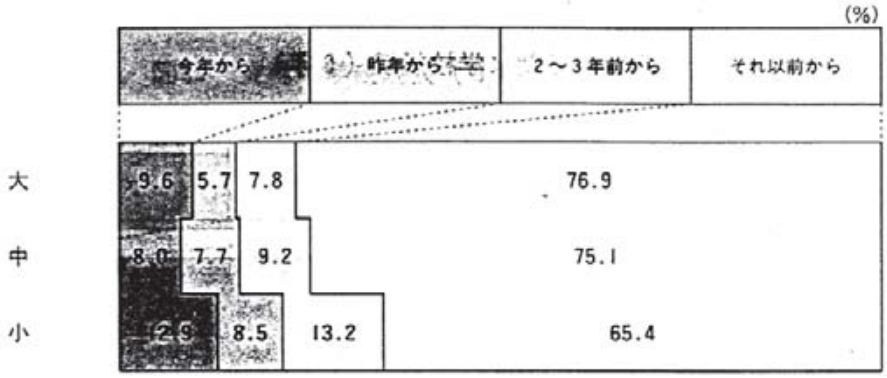


図30　費用×学校規模（5年）

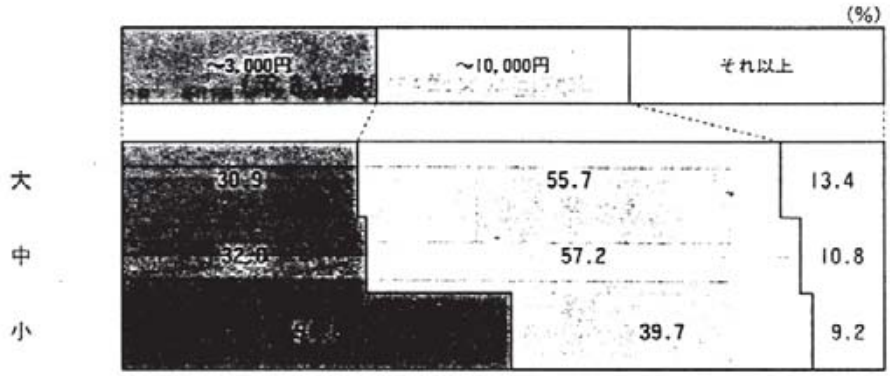


図31　利用する施設×学校規模（5年）

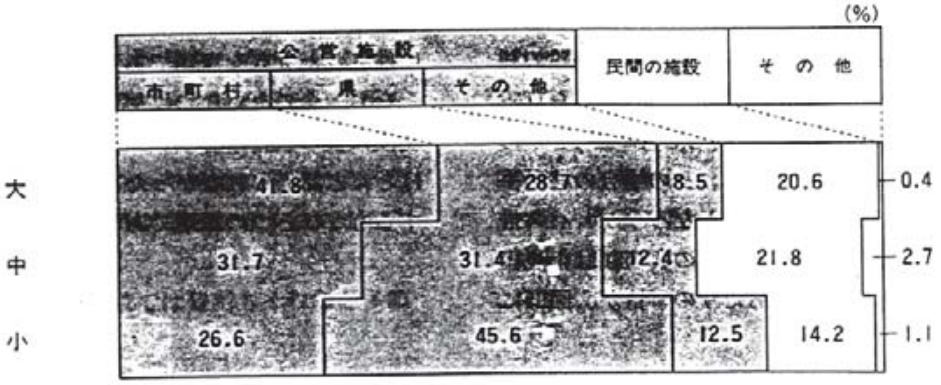


図32　期間×学校規模（6年）

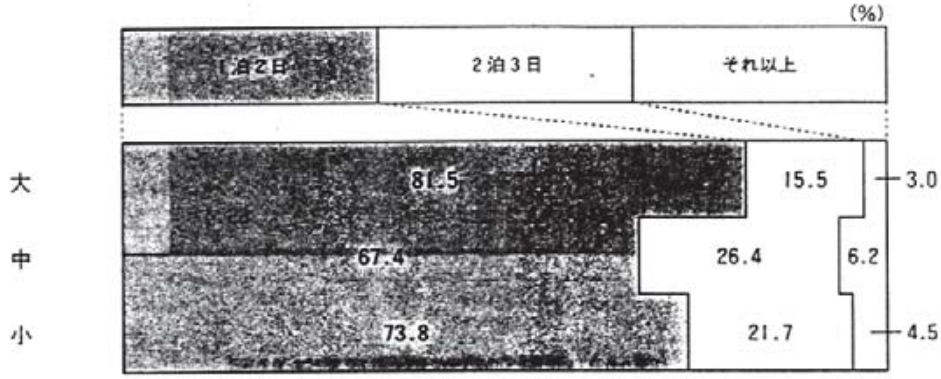


図33　実施回数×学校規模（6年）

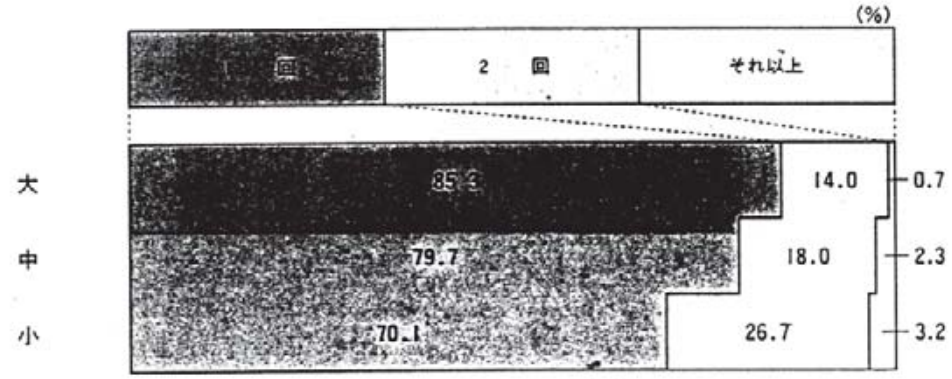


図34　行き先選定の時期×学校規模（6年）

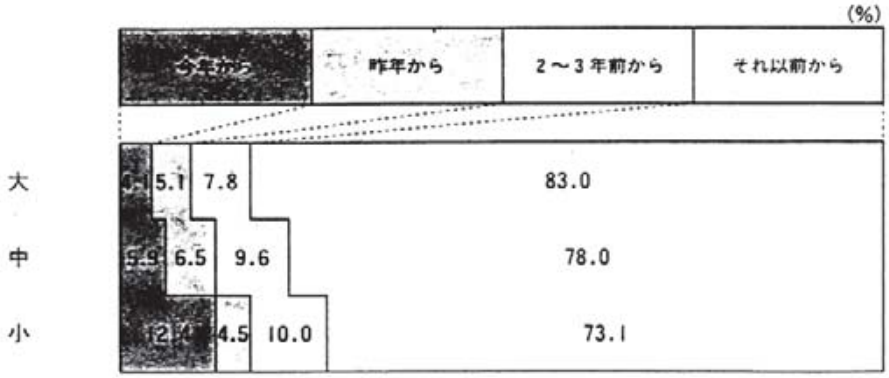


図35　費用×学校規模（6年）

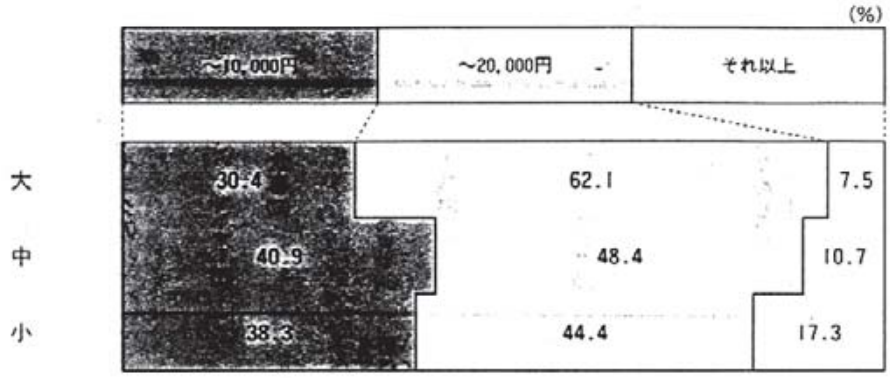
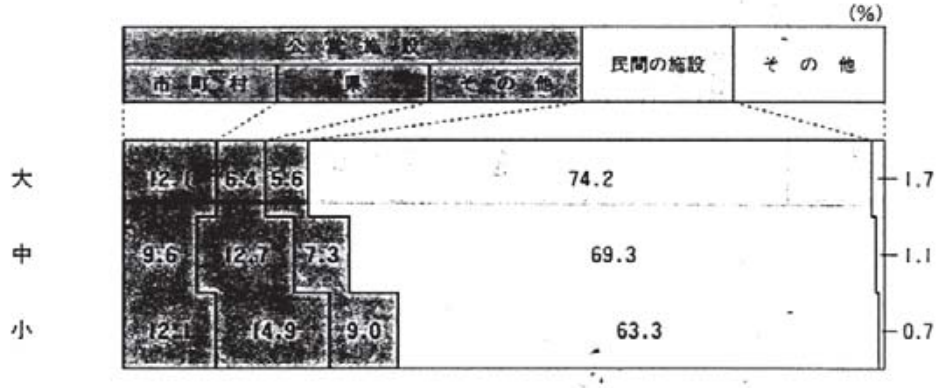


図36　利用する施設×学校規模（6年）



地域性と校外学習

人工的に整備された大都市に住む子どもたちには豊かな自然を、文化的な刺激に乏しい地域の子どもたちには文化的施設を、というのが、校外学習の基本的な構図であろう。

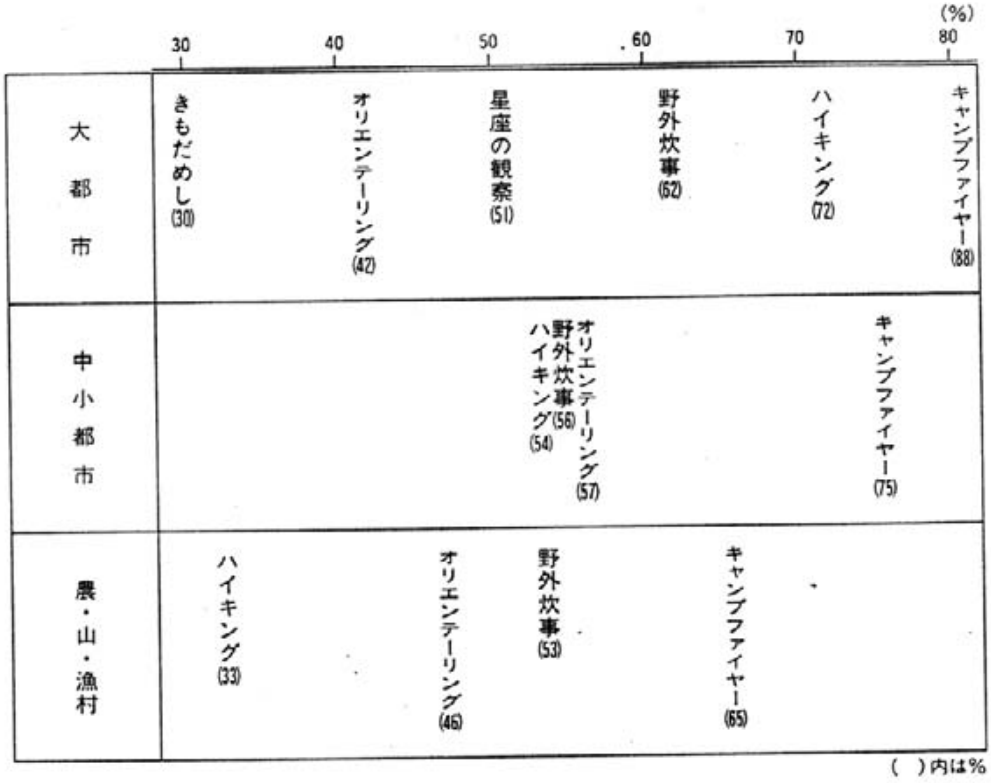
そこで、地域別に校外学習のプログラムの特徴を整理したのが、**図37**と**図38**である。

この図は、左右に実施率のスケールをとり、項目の位置を特定してある。したがって、図の右にある項目ほど実施率が高いことを示している。

まず、図37の５年生の場合では、「大都市」の88％の学校がキャンプファイヤーをする。以下、「中小都市」「農・山・漁村」の順に、この数値は約10％ずつ低下する。そして、ハイキングや野外炊事も、ほぼ同様な傾向を示している。

大都市に住む子どもたちにとって、こうしたプログラムの思い出は深いものになるにち

図37　地域別に見たプログラムの特徴（５年）



（　）内は％

がいない。しかし、その一方で、大都市の子どもたちのそれに相当する農・山・漁村のプログラムは登場してこない。あるいは、今回の調査で用意した選択肢の中に、それらを網羅しきれなかったせいなのかもしれない。

そして、ここでも問題になるのは、次の図38に示したように、6年生の場合である。

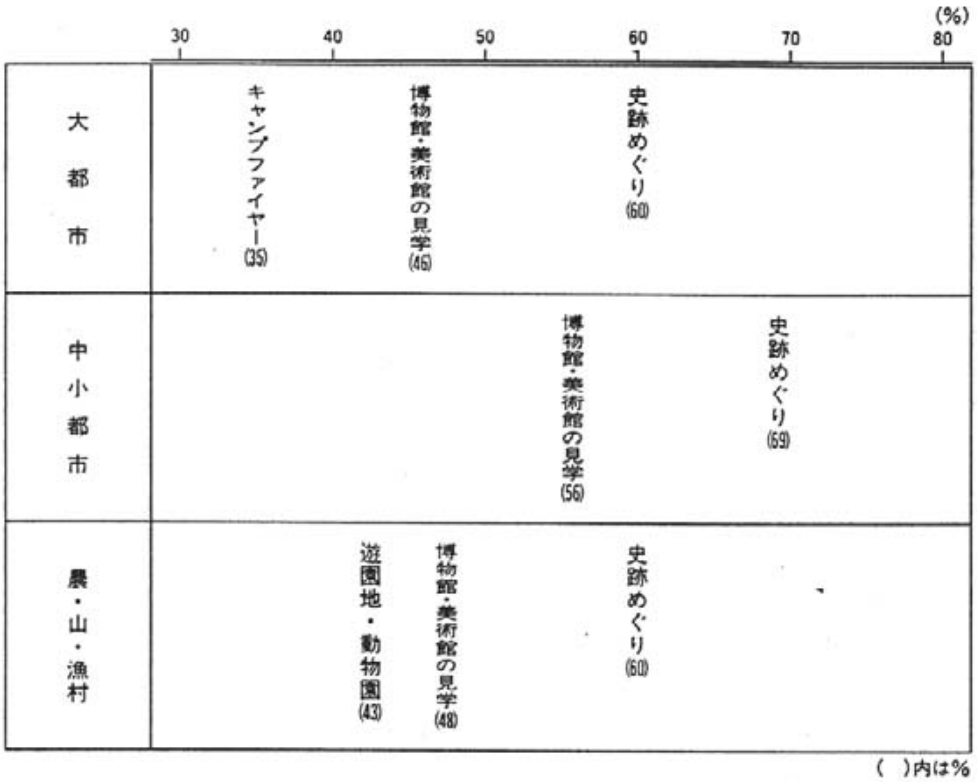
項目ごとの数値に幾分かの差はあるものの、全体としては、いずれの地域においても「史跡めぐり」と「博物館・美術館の見学」が中心にとらえられている。

さしあたって早急な対応が望まれるのは、この部分であろう。

以上、いくつかの観点から、校外学習の実施をめぐる実情をとらえてきた。それを整理すると、おそらく住んでいる地域的な環境や学校規模などの諸条件に応じて、それにふさわしいプログラムをどう開発するか、そして、5年生から6年生、あるいはそれ以前の学年も含めて、校外学習のカリキュラム化をどう図るか、の2点に問題が集約できよう。

そして、学校としてのそうした対応を支えるためには、何といっても宿泊施設をはじめとする条件整備が必要となる。校外学習のプログラムがいずれの学校でも画一的になっている背景には、そうした条件が必ずしも十分ではないという実情があるのだから。

図38　地域別に見たプログラムの特徴（6年）



7．豊かなプログラムの実現のために

ここまでの報告は、全て量的な処理の結果をもとにしていた。しかし、すでにふれたように、校外学習をめぐる新たな動向はそうした処理の中に埋没してしまう可能性がある。

そこで、調査票とともに送付していただいた「校外学習のしおり」を手がかりにして、質的な分析を試みたいと思う。

この手法には、必ずしも明確な方法論がない。そのために、やや主観的な判断や解釈がまぎれ込む可能性は否定できない。その点をカバーするために、ひとまず、「しおり」の特徴を整理するカテゴリーを設定し、量的に処理したデータの紹介から始めることをお許しいただきたい。

「校外学習のしおり」の特徴

校外学習を目前にひかえた子どもたちにとって、「しおり」を手にするのは、喜びや期待がぐんと広がる楽しいひとときである。そして、できることならその編集のプロセスにも参加し、夢を一層大きく広げておくことにも意味がある。

つまり、校外学習を成功させるポイントのひとつは、準備段階で、子どもたちが期待と見通しの両方をどれだけ確かに抱けるかにある。

その点について、送付されたしおりを手がかりにした分析を試みたい。なお、送付されたしおりはダンボール4箱にもなったが、今回の分析では、集計の便宜も考えて、その中

の無作為に抽出した100校分を対象とした。

まず図39は、しおりの体裁について整理したものである。

B５判(の袋とじ)、20ページ、そして教師がワープロで打った文字が並んでいるというのが、最近のしおりの平均的な体裁である。

この中では、特に、子どもたちが書いたと思われる文字が含まれているしおりが、わずか32校（%）であるという数値に注目しておきたい。ワープロ文字が並ぶしおりは、たしかに見た目には美しい。しかし、そこに校外学習に特有のあたたか味や素朴さ、そして何よりも子どもたちの参加の形跡が残らないのはいかにもさびしい気がする。

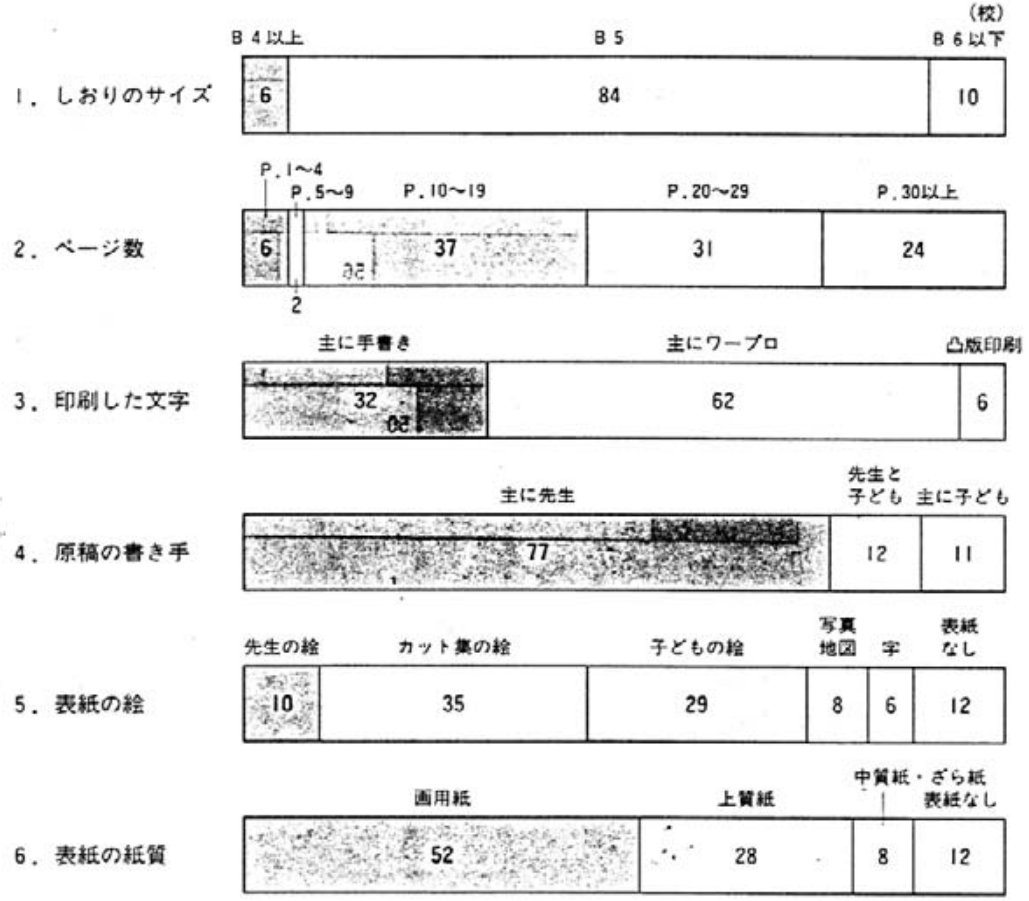
次に、図40を手がかりにして、しおりにはどんな内容が掲載されているかを確かめてみよう。

まず、しおりに欠かせないのは日程である。次いで、活動のためのグループ編成、そして見学先や活動場所に関する資料の順になっている。

こうした内容構成から想像されるのは、しおりが一種の「伝達」の機能を中心にして編集されていることである。

第４位にやっと登場してくるのが、「子どもの記録欄」である。準備段階や現地での記録も含めて、この欄を拡大することで、「活動の記録」という機能も合わせもつことができる

図39　しおりの体裁(100校中)



のではないだろうか。そんな角度からの検討も、ぜひしてみたいものである。

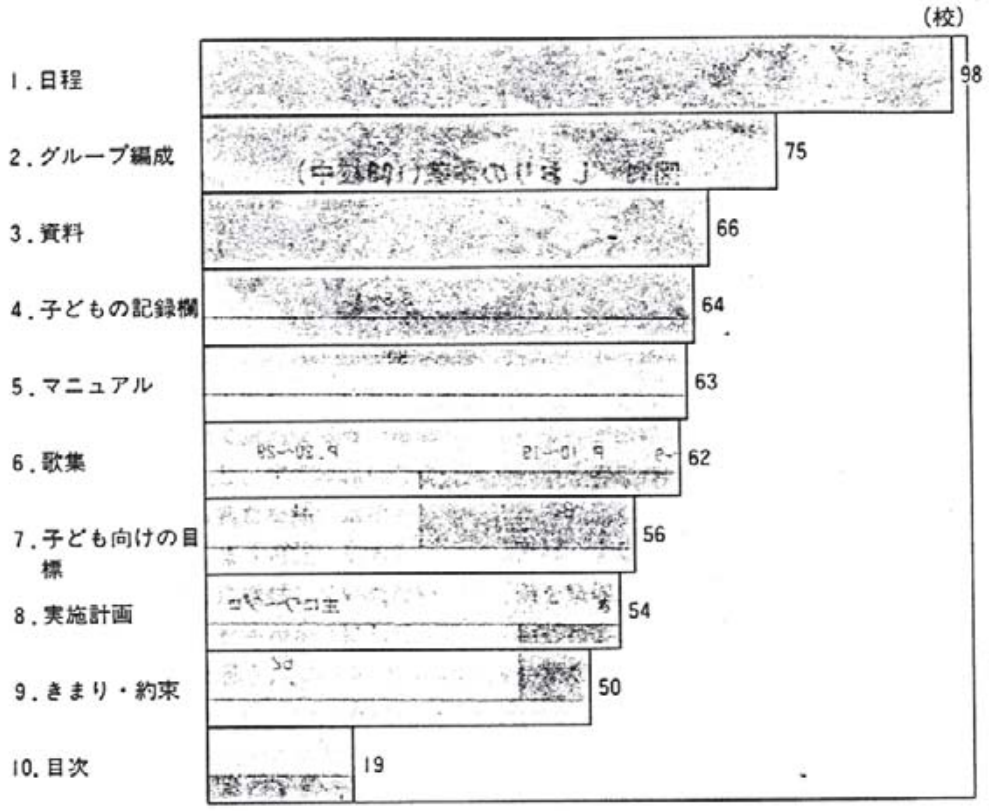
その点について細かくみたものが、次の図41である。

子どもたちが、しおりの記録欄に書く内容の第1位は、「反省文」である。これに、「持ち物のチェックリスト」以下の項目を加えれば、大半は活動を効率的に整然と進行させるための内容で占められてしまう。

せめて「メモ」や「日記」の欄を拡充し、子どもたちにとって意味のある記録を残したいものである。

以下、念のために、活動のための具体的な手順をまとめたマニュアルや歌集についての掲載率も掲げておいた(図42、図43)。こうした部分については、事前に子どもたちに用意

図40　しおりの内容（100校中）



させることに大きな意味がある。その結果として、しおりには子どもたちの手書き文字が並んでもよいと思えるのだが。

その一例として、送付されたしおりの中から、札幌市立平岸小学校の例を紹介する（資料1）。

子どもたちが書いた文字の行間から、準備段階における先生方の計画的な指導ぶりがうかがえて楽しい。

念のために、補足するならば、この学校のしおりは、全体で90ページにも及ぶ。その中で子どもたちが書いたページは、表紙も含めて約80%を占める。紹介するのは、その中のほんの一部である。

図41　子どもの記録欄（100校中）

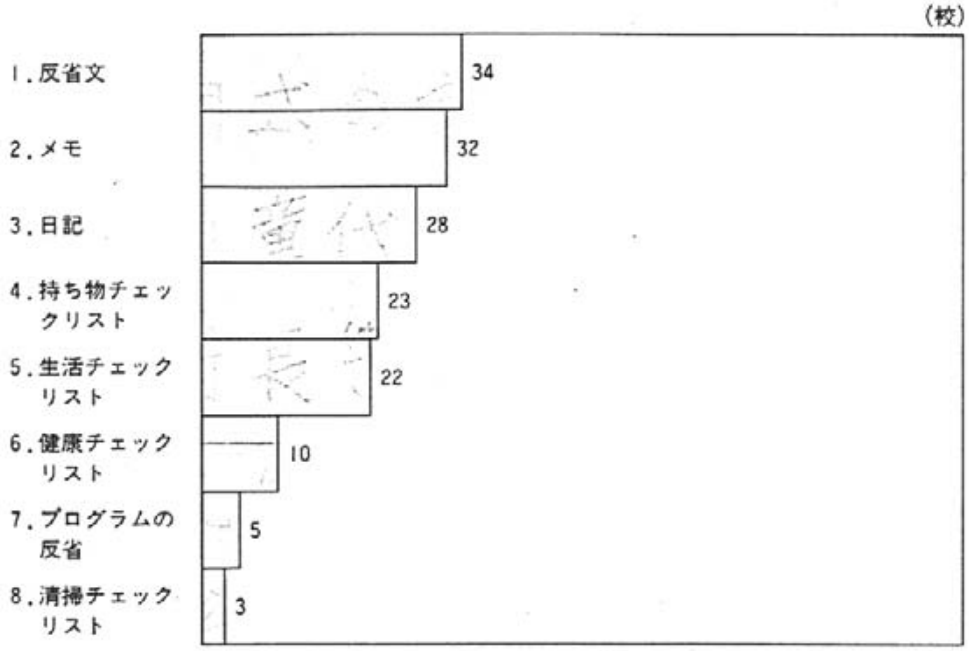


図42　マニュアル（100校中）

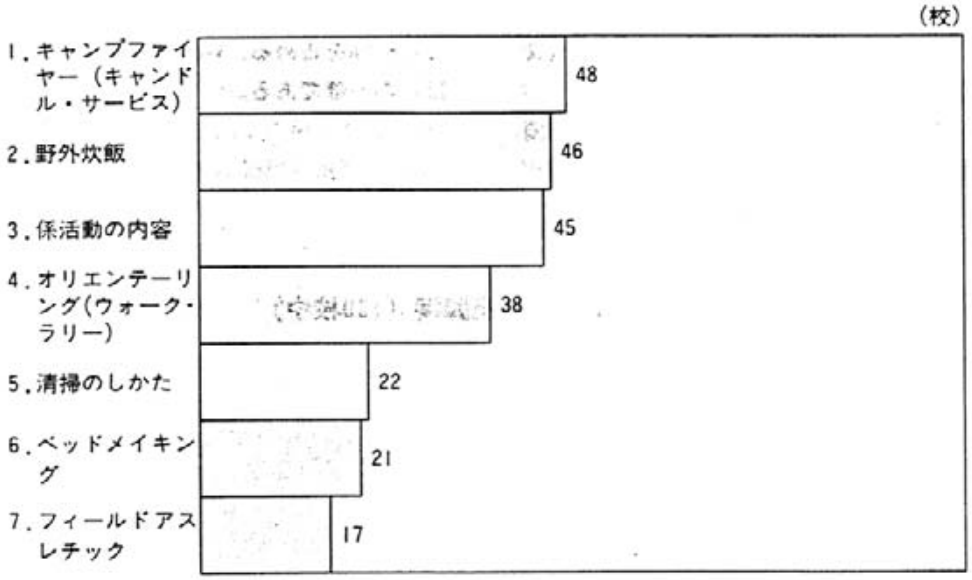
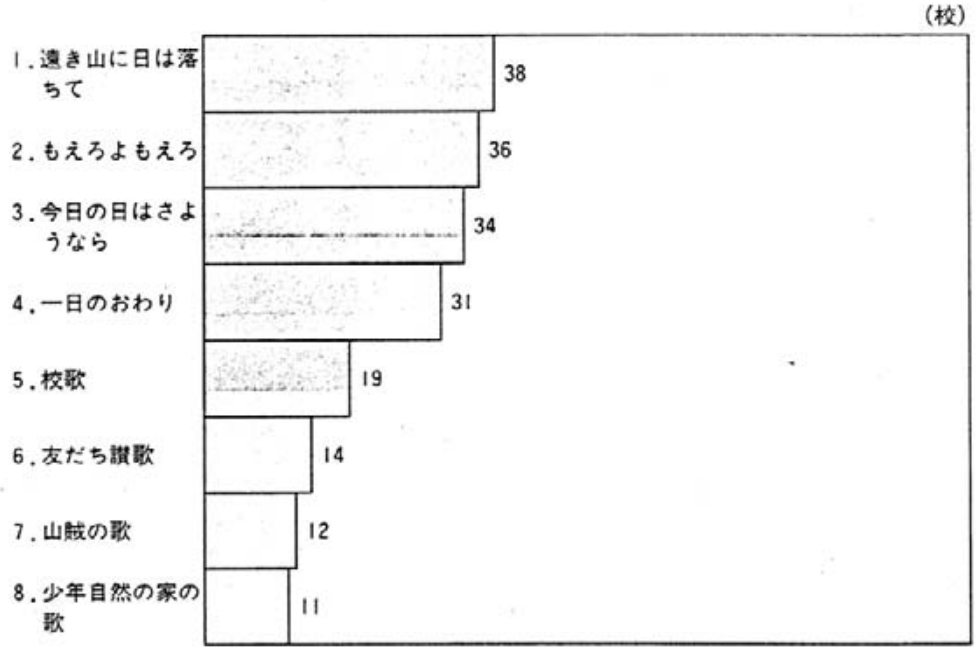
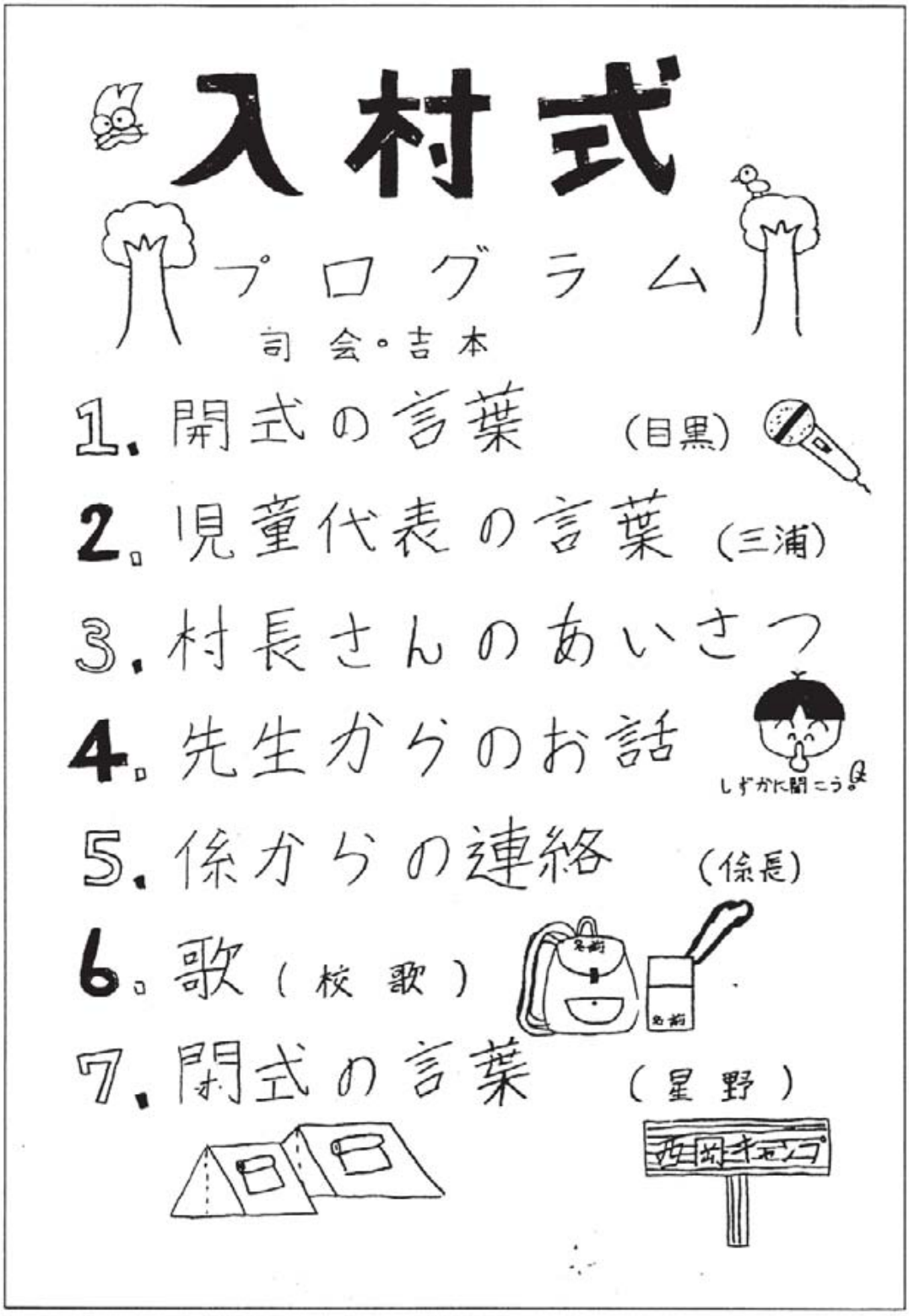


図43　歌集（100校中）



資料１　札幌市立平岸小学校のしおり（一部）



資料１　札幌市立平岸小学校のしおり（一部）

もちもの

	用　具	材料
グループ	ほうちょう(2本)	
	かわむき　(2本)	
	おたま(2つ)	
	うちわ(古いの2こ)	
	へら(2つ)	
	ボール(2つ)	
	ざる(2つ)	
	スチ(2つ)ルウール	
	クレンザー(1本)	
	マッチ　1はこ	
	ゴミぶくろ(2まい)	
	まないた(2まい)	
こじん	新聞紙(1日分)	
	食器(はし、スプーン)	
	軍手(めん)	
	かんづめ	
	米　1合	
	エプロン	
	かぶるもの	

資料１　札幌市立平岸小学校のしおり（一部）

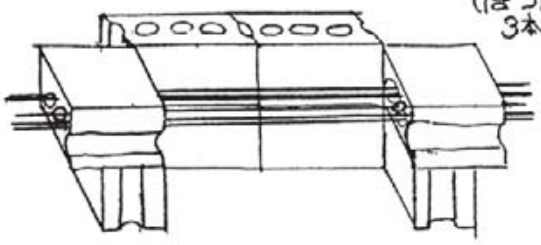
材料	分量	費用

かかった費用	
1人分の費用	

資料１　札幌市立平岸小学校のしおり（一部）

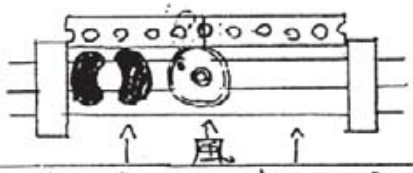
かまどの作り方

・ブロックの基本的な組み方
（正面から）



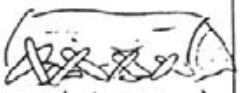
・はんごうを鉄棒にのせるときは、火がはんごう全体をつつみこむようにするため、必ずはんごうの背と背、腹と腹がむかい合うようにおく。

（上から）



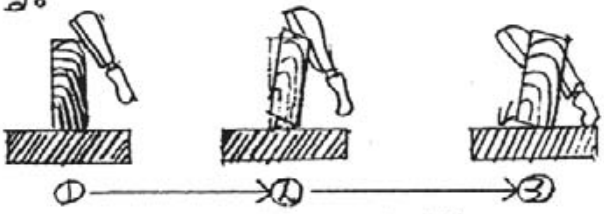
・かまどの中のまきの組み方の例

（いけだに）


（太いまきにたて）

なたの使い方

①まきを持つ手に軍手を必ずつける。
②頭の上から大きくふりおろさない。
③まきを片手で持ちナタの刃をまきに合わせる。
④ナタといっしょに2～3回とんとんとまきをわる台に打ちつけ、ナタの刃を食いこませる。
⑤ナタがまきに食いこんだら、まきから手をはなし、くさびを打つように、ナタの重みを利用してわっていく。
⑥まきは、大・中・小とわっていく。
⑦使いおわったらすぐにかたづけるようにする。



※まきをわる台は、たいらな木を使い、ブロックの上では、ナタの刃がいたんでしまうので、まきをわらないこと

プログラムの編成をめぐって

量的な処理が困難であったプログラムの編成について、最後にふれておきたい。

資料2に紹介するのは、いわき市立小川小学校のプログラム編成の例である。

一見すると、何の変哲もないプログラムである。しかし、細かな時間が記入されていない分だけ、かえって新鮮に映る。その点については、**資料3**に例示したプログラム例と比較すれば、一層はっきりする。(これは、いくつかの学校の例を参考にして書き直したものである)

さて、時間的にはいわば大まかな目安しか示していないプログラムの下で、どのような活動が想像されるであろうか。

端的に言えば、弾力的なスケジュールの組み変えが可能になるということである。現地に行けば、予測できなかった事態が頻発する。教師が丹念に下見をしたとしても、子どもの足で歩いた後の疲労感は予測できない。思ったより時間がかかる活動もある。

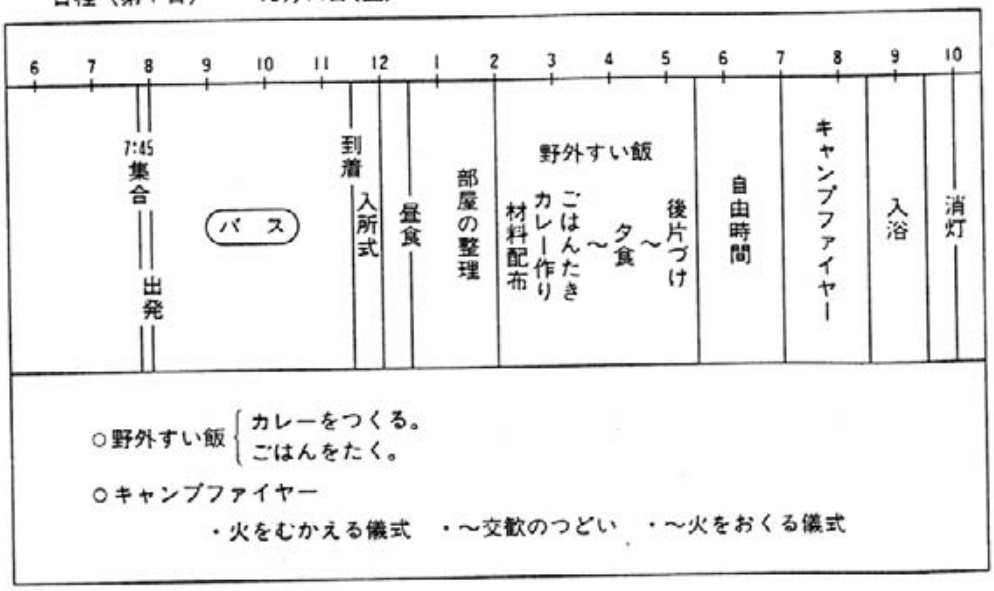
そうした事態にきめ細かく対応するためには、事前の計画は大まかに、そして、細部については現地に行ってから、という設定の仕方が理想的なのではなかろうか。あらかじめ細部まで設定しておいて、そのスケジュールに追われて動くというのでは、校外学習本来の意味が薄れてしまう。

もっとも、大人数を引率せざるを得ない大規模校では、必ずしもこの原則を貫くことは容易ではないという実情もわかるのだが。

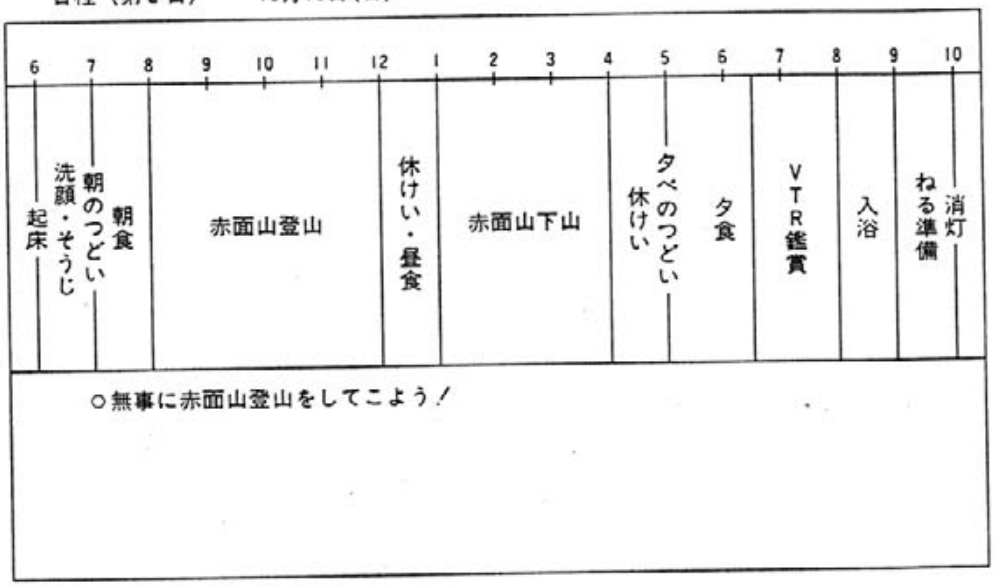
最後に、小川小学校のしおりの最後のページの内容を紹介しておきたい。現地での活動ぶりが想像できて、何とも楽しい気分にさせられる(**資料4**)。

資料２　いわき市立小川小学校のプログラム例

日程（第１日）　　10月14日(土)



日程（第２日）　　10月15日(日)



資料３　平均的なプログラムの例

第２日　　10月５日（木）

時　刻	活　動	注意事項
6:00～ 6:30	起床　　整とん	・合図で起床
6:30～ 7:00	朝のつどい	・す早く無言で整列
7:00～ 8:50	朝食、清掃	・セルフサービス
8:50～10:10	竹工作	・小刀の準備
10:10～10:30	移動	・口をとじてすばやく行動
10:30～12:00	博物館見学	・静かに見学する
12:00～13:30	昼　食	・部屋ごとに食堂に集合
	自由時間	
13:30～14:50	地引き網	・指示に従う、班ごとに整列
14:50～15:10	移動	・班ごとに
15:10～16:50	テント張り	・道具の確認　　・全員で協力して
16:50～17:30	夕べのつどい	・レクリエーション係を中心に行う
17:30～18:30	夕食　　整とん	・朝食と同じ
18:30～19:00	研修	・部屋で反省日記を書く
19:00～19:40	入浴	・忘れ物に気をつける
19:40～21:30	研修	・第一研修室に集合
21:30～21:45	班長会	・班長は201号室に集合
21:45～22:00	就寝準備	・身の回りの整理　　・用便
	反省会	・部屋ごとに行う
22:00～	就寝・消灯	・口をとじる

資料４　いわき市立小川小学校のしおりから

身分証明書

いわき市立小川小学校
5年　組

上記の者は、当校の宿泊訓練の児童であることを証明する。

なお、有効期限は、平成元年10月14日～10月16日の3日間とする。

平成元年10月2日
いわき市立小川小学校長
○○○○

・電話

学校	0246（12）3456
自然の家	0248（12）3456
自宅	0246（　）

地球社会の子どもたち ㉕

バンコクーその4
教室の風景

放送大学客員教授
深谷昌志

偏見をなくす

どこの社会にせよ、一度その国を訪れるとなんとなく、その社会が気にかかり、新聞記事をスクラップしたり、関連する雑誌や本を集めたりする。その際、一度であっても、その社会を訪ねていると、その体験を手がかりとして情報を取捨選択できるので、より正確にその社会のイメージをまとめられるようになる。

これまで訪ねた国では、韓国が行く前と行ってからとでもっとも気持ちの変わった国だったように思う。正直にいって、韓国へ出かける前、韓国についてほとんど無関心で、それだけに、韓国に無意識であるにせよ、低く見る感覚や一種の不快感などを抱いていなかったといえば、うそのような感じがする。しかし、ソウルを訪れて話を聞いてみると、食器や住宅、そして服装などのほとんどすべての文化が、中国から朝鮮半島を経て来日しており、それだけに韓国が日本の兄貴分であることがわかった。

さらに、戦前のことではなく、豊臣秀吉の出兵が現在でも韓国人に心のわだかまりを残しているのを知った。そして日本からの視座でなく、韓国から日本をみると、朝鮮半島に守られ、しかし守られているのも知らずに、平和に浮かれている日本という構図が浮かんでくる。

そうした感覚が重なってくると、日韓の摩擦のかなりが日本サイドの無理解や無知から生じていると思うようになった。それと同時に、現在ではハングルを見ると、なんとなく親しみを感じる。

韓国に限らず、その社会を訪ね、そこに暮らす人々と話をするにつれ、その社会に親しみを感じ、偏見や誤解をする割合が減る。そうした体験をそれぞれの社会について重ねてきたが、そうした中で、タイはカルチャー・ショックを比較的持たないですむ社会だった。「微笑の国」と言われるだけに、人々が温和で内向的な感じがする。そのため日本人が違和感を持たないですむのであろうか。あるいは、人々の皮膚の色や背の高さが日本人とあまり変わらないのに安心するのであろうか。

「王様と私」

ミュージカル「王様と私」がニューヨーク・キャストで公演されるというので、切符を手配しておいた。

実をいうと数年前、ニューヨークへ行ったとき、たまたま夜のスケジュールがあいていたので、評判の「キャッツ」をみにいくことにした。若い頃からの音楽ファンで、いろいろなものに接してきたつもりだったが、ミュージカルはなぜか縁がなかった。

しかし、躍動感あふれる動きは調和のとれた歌とあいまって、ミュージカルのおもしろさを満喫させてくれた。幸い、ブロードウェーにはいくつものミュージカルがかかっているので、「コーラスライン」や「レ・ミゼラブル」など、毎晩のようにみに出かけた。そして、時差の関係で「キャッツ」をみたとき寝てしまったので、もう一度、「キャッツ」をみにニューヨークへ出かけるほどのミュージカル好きになった。

ミュージカルがはねると、ブロードウェーから五番街のはずれにあるホテルまで歩く。決して治安のよい町ではないが、それでもこのあたりは安全だし、それにほぼ同じ時刻にどこのミュージカルも終わるのでけっこう人通りが多く、今聴いたばかりの「メモリー」(「キャッツ」の中のヒットメロディ)や「ワン」(「コーラスライン」)を思い浮かべながらホテルへ戻るのはなんとも楽しかった。

そうした思い出はともあれ、ユル・ブリンナーで有名な「王様と私」は、良くも悪くもバンコクを象徴している。「蝶々夫人」に日本のイメージを重ねられては日本人としては不満が残る。しかし、誇張が多いといっても「蝶々夫人」の中に日本の一面が含まれているのは否定できない。

それと同じように「王様と私」からバンコクを連想するのは、タイの人にとって快いものであるまい。現在でも、タイで「王様と私」の上演(映画)が禁止されているのも納得できる気がする。

しかし、シャムの王朝に家庭教師として勤めたアンナの自伝をベースにしただけあって、われわれのイメージにあるタイが舞台で展開される。

よく知られている通り、これはタイの近代化の基礎を作ったラーマ四世の話で、後のラーマ五世がチュラロンコーンの名で息子として登場している。

近代化を図るために西欧の文化を吸収しなければならないと、王子や王女の教育にイギリス女性を招く。そうしたラーマ四世の宮殿は現在もバンコクに残っており、観光の名所でもある。それまでのいかにもタイ風の建物と異なり、ベルサイユ宮殿のように完全に西欧化した建物にラーマ四世の決意をみる思いがする。ちなみに、ラーマ五世は西欧とタイとをミックスしたかたちの宮殿を残している。

ラーマ五世は、日本の明治天皇と同じ年に即位し、明治の終わる前年に死去している。そうした統治期間の長さと果たした役割からいって、タイの人たちはラーマ五世は日本のエンペラー・メイジと同じだという。それだけに知識人の間に明治時代のことに通じている人が多い。しかし残念ながら、日本人の中でラーマ五世を知っているのはタイ通の人に限られていよう。という筆者も、バンコクを訪ねるうちにそうした事情を知ったのだから、それほど立派なことはいえそうにない。そうした事情からすると、「王様と私」は日本流にいうと、幕末時代の物語であろう。

それはともかく、「王様と私」の中でラーマ四世が死去し、即位をしたラーマ五世が地面にひれふすかたちで「蛙のような」(といっているが)おじぎの仕方を廃止すると宣言して

いる。

現在でも学校を訪れると、子どもたちが合掌した手を目のあたりまであげながら黙礼してくれる。品もよく、なんとも優雅な感じがして、そうしたしぐさを見ているだけで、バンコクびいきになってしまう。

ミリタントな風景

これまで、かなりの数の国の学校を訪ねてきた。そしてその社会により、その社会らしい学校があるのに気づいた。陽気で楽しそうなロサンゼルス、そして几帳面で整然としたハンブルグ、あるいは、なんとなくしゃれたパリ、活気にみちあふれたシンガポールなどがイメージに浮かんでくる。

そうした意味からすると、バンコクの学校のイメージは、「王様と私」のようなきちんとした秩序の保たれた王朝文化の中の学校という印象を受ける。

実際に教室に入っても、室内がしんとしている。そして、子どもたちが正面を向き、静かに話を聞いている。日本の場合、静かといってもなんとなくざわついているが、バンコクの教室は文字通りにしんとしている。

そして、教師から指名されたときもみんなが一斉にわいわい騒ぐのでなく、静かに手をあげる。それだけに、教室内に40人もの子どもたちがいないように思う。

実をいうと、そうした静かな雰囲気は教室内だけでなく、校庭での子どもたちの動きにもみられる。遊び時間はむろんだが、体育の時間でも子どもたちはあまり大きな声をあげることなくにこやかだが、しかし、静かに動き回っている。

教師と子どもとの関係という意味では、それぞれの社会にその社会なりの感じが認められるが、その中でも強く印象に残ったのはソウルの教室だった。

教室の中はしんとしている。といっても、バンコクと異なり一種の緊張感がただよっていて、子どもたちの姿勢もちゃんとしている。よく見ると、子どもたちの手は椅子のうしろにある横の棒（補強のために入っている）を握っている。そして、「わかった人は手をあげて」と言われると、棒を握っていた手をほどいて5本の指をきちんとつけて、半分の高さ

までまっすぐに腕をあげる。もちろん、無言のままだ。

そして誰かが指名されると、手をさっとおろし、うしろの棒をにぎる。かなり異様な光景なので理由を尋ねてみた。そうしないと、子どもたちはいたずらをする。だから、いたずら防止に椅子のうしろの棒を握らせているという。

そうした教室風景はひとつの学校だけでなく、他の学校でも程度の差こそあれ、同じように行われていた。さらにいうなら、きびしい規則が作られ、それがきちんと守られている教室の風景は、教室外の体育の時間や朝の会などにも認められた。

動作がきびきびしていて気持ちが良いが、なんとなく不快感もする。考えてみると、筆者が第二次大戦中過ごした国民学校に雰囲気が似ている。ひとくちにいって、ミリタントな教室風景である。

「今を生きる」

今から10年以上も前のことだが、はじめてアメリカの学校を訪ねたとき、子どもたち、そして教師の姿勢の悪さに驚いた。子どもたちは横を向いたり、足を出したり、ほおづえをついたり、とにかく思い思いの姿勢をしている。そうかと思うと、ジーンズ姿の教師は机の上に腰かけ、靴を椅子の上にぶらぶらさせながら話をしている。

その頃、「暴力教室」という映画が評判になっていた。しかし、それは大都市のレアケースだと思っていたのに、目の前の教室風景は暴力的でないものの、あまりにバラバラで休み時間のような感じがした。

現在では、アメリカの教室に慣れたのもたしかだが、アメリカの学校もここ数年来、きちんとしつけようとする態度が強まっているので、かつてほど教室がのびのびしなくなった。

それでも子どもたちがのんびりと、そしてマイペースで学校生活を送っている。教師は、その子が他の子に迷惑をかけるか、それとも本人が援助を求めるかしない限り、その子の自主性を認めている。それだけにがんばる子は自主的にがんばっていくが、怠ける子は怠ける自由を教師が認めている感じになる。少なくとも、強制させて勉強をさせることは少ない。

その結果、アメリカの子どもはがんばる子はがんばる代わり、怠ける子もでてくるので平均してみると学力の低下を招く。

こう考えてくると、教室内の教師と子どもとの関係は、単に教室内の雰囲気の問題でなく、そうした関係が教育のあり方をシンボライズしているのがわかる。

たまたま「今を生きる」(The Dead Poet Society)をみた。若い人の間でも人気になった映画だが、アメリカ東部の私立学校に赴任してきた英語の教師が型破りの授業をして、生徒たちの型にはまった思考態度を崩していく話だ。

教科書といっても良くない教材も含まれているから破ってもいい。あるいは、椅子の上に立ってみると発想がかわる。そして、思いきって声を出すと新鮮な見方が出てくる。

いずれも型破りだが、しかしよく考えると、よく考えたまじめな指導法である。しかし周囲は型破りの部分に注目して、その教師を非難する。結局、教師は学校をやめざるをえなくなるが、生徒たちがやめていく教師を椅子の上に立つかたちで見守るというのがラストシーンとなる。

封切られてから3か月以上たっているのでラストシーンを書いてもかまわないと思うが、教育関係者にぜひみてほしい映画のひとつだ。

それはともかく、教室の中の教師と子ども

との関係は、ある意味では平凡でありきたりの光景だが、国際比較というようなマクロな見方をすると、それなりにカラーがあるのはすでにふれた通りである。

日本の場合、それではどういう特色が認められるのか。静かなことはたしかだが、ソウルのように子どもたちのやる気を教師がきちんと整理しているという感じでもなく、バンコクのように温かいやさしい静けさでもない。

どちらかというと、無気力な子どもたちを教師が号令をかけて操作している印象を受ける。こうしたかたちだと、子どもたちを型にはめるのは容易であろう。しかし、自主的に判断をする子は育ちにくいような感じがする。

教師と子どもとの関係をもう少し生き生きと活発なものにできないだろうか。バンコクの場合、社会の発達段階から考えてもここ当分、教師が子どもに伝達するかたちの教育になるのはやむをえまい。しかし日本の場合、もう少し教師は子どもたちを信頼して、子どもたちの自主的な活動を認める学習指導を試みてはどうか。バンコクの教室を見て、日本の学校がここ半世紀、ほとんど進歩していないのではと思うようになった。

教育改革というと、ともすると学校制度の改革などを考える。そして、制度いじりは予期されるほどの効果をあげることは少ない。

考え方によっては教室内の教師と子どもとの関係を見直すことはこまかいように見えて、もっとも基礎的で、しかも効果の上がる改革のように思える。

バンコクでは、ものすごいスピードで近代化が進んでいる。高層ビルと大型の自動車のかたわらに、裸足の僧侶と人力車とがみられ、雑然とした感じがする。そしてバンコクに長期滞在している人の話では、古き良きバンコクが失われつつあるという。そうだとすると、「王様と私」を連想させるような教室風景も、いずれ失われていくのかもしれない。しかし、それが子どもたちにとっても、そしてタイ人にとってもしあわせなものかどうかわからないが、2～3年して、そうした変化のゆくえをもう一度見てみたいと思いつつ、バンコク空港から東京への飛行機に乗った。

調査のお願い

時下、先生方には、お忙しい日々をお過ごしのことと拝察申し上げます。

さて、私ども「小学生モノグラフ同人」は、10年ほど前から、現代の子どもたちに関するデータバンクを作成する作業を続けてまいりました。

今回は、**「宿泊をともなう校外学習」**をテーマに、以下に示しますような全国調査を企画いたしました。

現在、「新指導要領・特別活動」にも示されておりますように、平素と異なる生活環境の中で、自然や文化などに親しみ望ましい体験を積ませるための教育活動が重視されております。その現状を明らかにし、今後にあるべき方向を探る作業は、今日的な教育課題のひとつとして大きな意味を持つものと思われます。

ご記入いただきました内容のことで、先生方や貴校にご迷惑をおかけすることはございません。ご多忙中恐縮ですが、以下の要領に従いまして、調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

放送大学客員教授　深谷昌志

◆ 回答要領

- 調査票は、本状右ページの全体質問紙と各学年別質問紙とに分かれております。
- 全体質問紙には、教務主任の先生がお答えください。
- 学年用質問紙は、念のために全学年分用意いたしましたが、宿泊をともなう校外学習を実施している学年のみ、学年主任の先生にご回答いただきたく思います。(実施していない学年の分は、廃棄してください。)
- お手数でも、回答済みの調査票は、全体質問紙を一番上にして、以下、学年順に重ねてホチキスでとじてください。
- とじた調査票は、同封の封筒をご利用の上、**11月20日(月)**までにご返送ください。

※たいへんあつかましいお願いですが、実施している学年のプログラムの全体がわかるような資料（しおりなど）がございましたら、同封していただけるとありがたく存じます。

教務主任の先生用

単位：サンプル数以外はパーセント

サンプル数 1,006

1　まず、貴校のことについておたずねします。

1）所在地……［　　］県の（1．大都市 39.0　2．中小都市 29.5　3．農・山・漁村 31.5）

2）学区……（1．住宅地 50.3　2．商業地 13.5　3．工業地 1.6　4．農・山・漁村 34.6）

3）学校規模……学級数［　　］学級　児童数［　　］人

4）学校創立後…［　　］年

1.極小規模校（6学級以下）	19.4
2.小規模校（7～12学級）	20.2
3.中規模校（13～18学級）	23.6
4.大規模校（19～24学級）	23.8
5.過大規模校（25学級以上）	13.0

2　貴校で、宿泊をともなう校外学習を実施しているのは、何年生ですか。実施している学年に全て○をつけてください。

1）1年 2.4　2）2年 2.6　3）3年 4.3　4）4年 17.5　5）5年 92.3　6）6年 95.1

3　貴校では、宿泊をともなう校外学習を実施する際に、特に念を入れて検討することはどんなことですか。

	とてもそう	わりとそう	あまりそうではない	ぜんぜんそうではない
1）児童の安全や健康の保持	90.6	9.0	0.3	0.1
2）引率教員の確保	18.2	53.4	26.2	2.2
3）実施に必要な費用	27.9	44.1	25.1	2.9
4）校外学習の内容（プログラム）	67.3	30.0	2.7	0.0
5）教育課程への位置づけ（ねらい）	41.0	47.2	11.2	0.6
6）利用する宿泊施設	29.7	47.9	18.1	4.3
7）方面や場所	27.1	47.4	21.5	4.0
8）企画立案のプロセス	43.2	45.7	10.0	1.1

4　行き先の決定については、貴校ではどうなさっていますか。

1）学校として決めてある　73.9
2）教育委員会の指定した方面や場所がある　12.3
3）毎年、当該学年で選定する　9.3
4）その他（　　）　4.5

5　貴校での宿泊をともなう校外学習への対応は、ここ数年の間にどのように変わってきていると思われますか。

1）積極的に実施しようという声が、年々高まってきている　9.1
2）以前から、学校として積極的に実施してきている　84.8
3）以前から、学校としては特に力を入れてはいない　3.8
4）諸事情から、実施にはそれほど積極的ではなくなってきている　2.3

（全体質問はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。）

● 資料2　調査票見本(学年別)

〔1年～6年まで同じ〕

1 あなたの学年で実施する宿泊をともなう校外学習の期間は、次のどれに該当しますか。

1）1泊2日　2）2泊3日　3）3泊4日　4）それ以上

2 年間に何回実施しますか。

1）1回　2）2回　3）3回以上

（2回以上実施している場合は、その中で最も長期にわたって実施しているものについて、以下の設問にお答えください。）

3 行き先は、次のどれにあてはまりますか。

1）市町村内　2）県内　3）県外（　　県）

4 現地までの主な移動手段は、次のどれですか。

1）徒歩　3）貸し切りバス　5）その他
2）定期バスや電車　4）臨時（専用）電車

5 行き先を今の場所にしたのは、いつ頃からですか。

1）今年から　2）昨年から　3）2～3年前から　4）それ以前から

6 あなたの学年での宿泊をともなう校外学習は、どのような名称ですか。

1）修学旅行　4）野外教室　7）自然教室　10）その他（　　）
2）臨海学校　5）移動教室　8）自然学級
3）林間学校　6）校外学習　9）体験学習

7 おさしつかえなければ、子ども一人あたりの費用を教えてください。

1）3,000円以下　4）10,000円くらい　7）25,000円くらい
2）5,000円くらい　5）15,000円くらい　8）それ以上
3）7,000円くらい　6）20,000円くらい

8 利用する宿泊施設は、次のどれに該当しますか。

1）学校　3）県の施設　5）その他の公営施設　7）その他
2）市町村の施設　4）国の施設　6）民間の宿泊施設

9 民間の宿泊施設を利用する場合、その種別は、次のどれに該当しますか。

1）民宿　3）旅館　5）キャンプ場　7）その他
2）ホテル　4）ペンション　6）ユースホステル

10 **子どもたちが持っていってよいおこづかいの額は決めていますか。**

1）決めている ―――→（　　）円

2）決めていない

3）持たせない

11 **現地まで往復する間、服装についてのきまりがありますか。**

1）ない

2）ある

1．学校の制服をそのまま着用させる

2．トレーニングウェアなどを着用させる

3．帽子だけそろえる

4．その他

12 **次の中で、引率された方全てに○をつけてください。**

1）校長　　3）教務主任　　5）専科教員

2）教頭　　4）養護教諭　　6）他学年の教員

13 **現地でのプログラムについておたずねします。下の□の中から、次の条件にあてはまるものを全て選び、番号を書き入れてください。**

1）今年の校外学習で実施したもの

2）昨年までは実施していなかったが、今年から新たに取り入れたもの

3）昨年までは実施していたが、今年から取り止めたもの

1．キャンプファイヤー
2．ハイキング（登山）
3．野外炊事
4．テント泊
5．ナイトハイキング
6．星座の観察
7．オリエンテーリング（ウォークラリー）
8．アスレチック
9．制作体験(土器作りなど)
10．勤労体験(田植えなど)
11．工作（竹とんぼ作りなど）
12．現地の人々との交流
13．きもだめし
14．フィールドワーク（野外学習）
15．映画会
16．スキー
17．スケート
18．水泳
19．スケッチ
20．テレビ局や新聞社の見学
21．博物館・美術館の見学
22．史跡めぐり
23．音楽や演劇の鑑賞
24．遊園地・動物園
25．工場見学
26．プラネタリウム
27．ケーブルカー・登山電車

〔5～6年のみ〕

14 次に、子どもたちの活動のようすについておたずねします。プログラムの全体を通じて、子どもたちの次のような活動は見られますか。

	はい	いいえ
1) 子どもの実行委員会（またはそれに代わる組織）で、活動のプログラムをつくる	1	2
2) 現地に行ってからの活動やきまりについて、学級会などで話し合う	1	2
3) しおりや歌集などの作成に、係の子どもたちが参加する	1	2
4) いろいろな活動のための係を決め、事前に打ち合わせや準備をする	1	2
5) 活動全体のテーマやスローガンについて話し合い決定する	1	2
6) 行き先について、子どもたちの希望や意見を聞くための何らかの手続きをとる	1	2
7) 現地に行ってから、グループ単位で活動するためのプログラムが用意されている	1	2
8) 現地についての資料を事前に入手し、活動のプランを立てる	1	2
9) 帰校後に、校外学習の思い出を作文や絵などにまとめる	1	2
10) 帰校後に、現地でお世話になった人々にお礼の手紙を出す	1	2

15 今年の校外学習について、行き先の決定や企画立案に際して、先生方が特に重点をおかれたのはどんなことですか。

	とてもそう	わりとそう	あまりそうではない	ぜんぜんそうではない
1) 規律ある集団行動をさせる	1	2	3	4
2) すばらしい自然にふれさせる	1	2	3	4
3) 仲間とのふれあいを大切にさせる	1	2	3	4
4) 社会的な見聞を広めさせる	1	2	3	4
5) 自主的に活動させる	1	2	3	4
6) 公衆道徳について考えさせる	1	2	3	4
7) すばらしい文化遺産にふれさせる	1	2	3	4
8) とにかく様々な体験を積ませる	1	2	3	4
9) 学級のまとまりについて考えさせる	1	2	3	4
10) 安全や健康に留意させる	1	2	3	4

16 **それでは、学校教育の一環としての校外学習は、今後どんな点に力を入れることが望ましいとお考えになられますか。**

	ぜひそうしたい	わりとそうしたい	あまりそうしたくない	ぜんぜんそうしたくない
1）規律ある集団行動をさせる	1	2	3	4
2）すばらしい自然にふれさせる	1	2	3	4
3）仲間とのふれあいを大切にさせる	1	2	3	4
4）社会的な見聞を広めさせる	1	2	3	4
5）自主的に活動させる	1	2	3	4
6）公衆道徳について考えさせる	1	2	3	4
7）すばらしい文化遺産にふれさせる	1	2	3	4
8）とにかく様々な体験を積ませる	1	2	3	4
9）学級のまとまりについて考えさせる	1	2	3	4
10）安全や健康に留意させる	1	2	3	4

17 **最後におたずねします。今年の校外学習について、先生は次の点についてはどのくらい満足なさっておられますか。**

	期待以上である	まあまあである	少し不満がある	全く思いどおりでない
1）子どもたちの活動ぶり	1	2	3	4
2）全体の企画	1	2	3	4
3）宿泊所の施設や設備	1	2	3	4
4）教育的な意義	1	2	3	4
5）所期のねらいの達成度	1	2	3	4
6）校外学習の期間	1	2	3	4
※3・4と回答した場合……（1．もっと長く　2．もっと短く）				
7）校外学習にかかる費用	1	2	3	4
※3・4と回答した場合……（1．もっと安くしたい　2．もっとかかってもいい）				
8）学校から現地までの距離	1	2	3	4
※3・4と回答した場合……（1．もっと近くで　2．もっと遠くで）				

（質問はこれで終わりです。なお、今年の校外学習のしおりがありましたらお送りください。）

● 資料3　学年別集計表

単位：パーセント

質問項目			学年別 4年	5年	6年
1	期間	1	78.7	45.9	73.7
		2	18.8	47.4	21.7
		3	2.5	4.2	3.4
		4	0.0	2.5	1.2
2	回数	1	94.4	93.9	78.7
		2	5.2	5.8	19.3
		3	0.4	0.3	2.0
3	行き先	1	55.0	22.5	6.4
		2	36.9	49.8	22.1
		3	8.1	27.7	71.5
		隣接県	75.0	67.5	35.0
		その他	25.0	32.5	65.0
4	移動手段	1	17.5	6.6	2.9
		2	3.8	7.2	9.7
		3	66.8	78.3	75.5
		4	0.6	1.8	8.4
		5	11.3	6.1	3.5
5	行き先の決定	1	11.7	10.1	7.3
		2	4.3	7.3	5.5
		3	13.0	10.0	9.3
		4	71.0	72.6	77.9
6	名称	1	0.0	4.7	75.7
		2	3.9	7.4	3.3
		3	15.8	19.5	5.7
		4	5.9	11.2	1.0
		5	1.3	1.3	3.3
		6	4.6	3.5	1.0
		7	4.6	7.5	2.1
		8	0.7	0.4	0.1
		9	9.2	4.8	1.0
		10	54.0	39.7	6.8
7	費用	1	72.4	37.5	10.1
		2	15.1	30.5	8.8
		3	3.1	8.8	4.7
		4	2.5	12.0	13.0
		5	3.1	4.8	35.5
		6	1.3	3.2	16.1
		7	1.9	2.1	6.6
		8	0.6	1.1	5.2
8	宿泊施設	1	11.2	3.5	2.0
		2	42.2	33.4	11.1
		3	28.6	34.8	11.3
		4	2.5	4.9	3.3
		5	3.7	2.7	2.0
		6	10.6	19.2	69.1
		7	1.2	1.5	1.2

質問項目				学年別 4年	5年	6年
9	民間宿泊施設		1	10.3	18.7	5.5
			2	12.8	15.9	35.6
			3	17.9	26.9	54.1
			4	0.0	0.0	0.7
			5	41.1	21.9	1.3
			6	0.0	2.1	0.8
			7	17.9	14.5	2.0
10	こづかい		1	7.8	14.6	76.0
			2	5.2	2.1	1.0
			3	87.0	83.3	23.0
11	服装	有無	1	27.5	42.4	56.3
			2	72.5	57.6	43.7
		種類	1	17.0	19.3	43.9
			2	68.1	63.7	27.1
			3	12.8	11.5	22.0
			4	2.1	5.5	7.0
12	引率		1	67.3	66.6	81.4
			2	61.0	50.8	29.0
			3	47.8	40.9	31.7
			4	76.1	84.4	87.8
			5	35.2	28.9	27.1
			6	54.7	56.5	55.2
13	プログラム	今年の実施	1	69.3	76.9	29.8
			2	32.5	54.2	22.3
			3	37.3	56.6	21.4
			4	13.3	16.1	7.6
			5	3.6	9.9	3.3
			6	15.7	35.7	11.6
			7	40.4	47.4	19.0
			8	31.3	19.1	5.1
			9	4.8	13.6	9.7
			10	4.2	4.4	3.3
			11	12.7	21.0	8.0
			12	5.4	3.7	4.8
			13	15.7	21.5	11.9
			14	22.3	23.6	12.4
			15	8.4	13.3	4.5
			16	1.8	1.7	1.9
			17	0.0	0.6	0.2
			18	11.4	11.3	7.7
			19	4.2	8.7	3.9
			20	1.0	0.3	3.8
			21	6.6	12.1	49.5
			22	4.8	10.7	62.9
			23	0.0	0.8	2.1
			24	5.4	3.4	24.9
			25	3.0	3.1	12.0
			26	10.8	3.8	7.5
			27	0.0	4.3	9.8

質問項目				学年別 4年	5年	6年
13	プログラム	今年から新たに実施	1	1.8	2.7	1.9
			2	3.0	10.0	7.5
			3	4.2	12.7	11.9
			4	1.8	5.5	1.3
			5	1.8	5.5	3.1
			6	2.4	14.5	6.9
			7	4.8	14.5	11.9
			8	1.2	5.9	3.1
			9	0.0	5.0	10.6
			10	1.2	2.3	4.4
			11	2.4	10.0	6.9
			12	1.0	2.7	3.1
			13	1.0	8.6	10.0
			14	1.2	8.6	8.1
			15	1.2	5.5	3.1
			16	0.0	0.5	0.6
			17	0.0	0.0	0.0
			18	0.0	4.5	3.1
			19	0.0	4.1	0.0
			20	0.0	0.0	1.3
			21	1.0	2.7	13.1
			22	0.0	1.4	4.4
			23	0.0	0.0	1.3
			24	0.0	0.9	6.3
			25	1.0	1.4	4.4
			26	1.0	0.9	6.3
			27	0.0	1.8	1.9
		今年から取り止め	1	1.2	8.2	5.1
			2	1.2	8.8	6.1
			3	4.2	10.9	12.1
			4	1.0	8.2	7.1
			5	1.2	6.8	1.0
			6	1.8	10.2	8.1
			7	3.0	17.0	6.1
			8	2.4	3.4	9.1
			9	1.0	4.8	6.1
			10	1.0	0.0	1.0
			11	3.0	8.2	6.1
			12	1.2	2.0	1.0
			13	3.0	8.8	7.1
			14	1.2	8.2	1.0
			15	1.0	3.4	3.0
			16	1.0	2.7	0.0
			17	0.0	0.7	1.0
			18	1.0	3.4	5.1
			19	0.0	4.1	2.0
			20	0.0	0.0	3.0
			21	1.0	3.4	12.1
			22	0.0	2.7	5.1
			23	0.0	0.0	0.0
			24	0.0	0.7	8.1
			25	1.0	2.7	8.1

質問項目				学年別 4年	5年	6年
13	ラブログ	今年から取り止め	26	1.0	0.7	2.0
			27	0.0	0.0	3.0
14	子どもの活動（「はい」の割合）		1		48.0	50.5
			2		91.2	93.9
			3		66.0	74.3
			4		98.4	96.1
			5		54.6	53.9
			6		10.4	18.2
			7		91.5	76.4
			8		88.1	87.7
			9		96.0	97.4
			10		36.1	34.1
15	重点指導事項	集団行動	1		68.3	70.2
			2		29.2	28.1
			3		2.5	1.7
			4		0.0	0.0
		自然とのふれあい	1		65.9	50.7
			2		28.5	32.8
			3		5.3	14.5
			4		0.3	2.0
		仲間とのふれあい	1		81.1	75.8
			2		18.1	23.2
			3		0.8	1.0
			4		0.0	0.0
		社会的な見聞	1		14.1	55.0
			2		44.9	33.4
			3		39.0	11.1
			4		2.0	0.5
		自主的な活動	1		59.0	42.6
			2		33.6	42.4
			3		7.4	14.8
			4		0.0	0.2
		公衆道徳	1		42.6	51.9
			2		50.1	44.4
			3		6.8	3.7
			4		0.5	0.0
		文化遺産とのふれあい	1		8.3	51.6
			2		23.4	28.1
			3		49.9	15.9
			4		18.4	4.4
		様々な体験	1		40.9	31.3
			2		46.6	48.8
			3		11.5	19.3
			4		1.0	0.6
		学級のまとまり	1		38.9	39.7
			2		44.4	46.9
			3		14.7	11.9
			4		2.0	1.5
		安全や健康	1		70.0	70.4
			2		27.2	27.4
			3		2.8	2.1
			4		0.0	0.1

● 資料3　学年別集計表

質問項目				学年別 4年	5年	6年
16	今後の力点事項	集団行動	1		68.7	69.7
			2		28.5	27.4
			3		2.8	2.9
			4		0.0	0.0
		自然とのふれあい	1		74.9	68.5
			2		23.7	28.8
			3		1.2	2.3
			4		0.2	0.4
		仲間とのふれあい	1		89.7	85.1
			2		10.1	14.8
			3		0.2	0.1
			4		0.0	0.0
		社会的な見聞	1		32.8	61.2
			2		54.6	35.3
			3		11.9	3.2
			4		0.7	0.3
		自主的な活動	1		81.3	71.9
			2		18.2	26.4
			3		0.4	1.7
			4		0.1	0.0
		公衆道徳	1		57.1	66.0
			2		40.3	32.9
			3		2.5	1.1
			4		0.1	0.0
		文化遺産のふれあい	1		27.0	58.8
			2		53.7	36.8
			3		16.7	4.0
			4		2.6	0.4
		様々な体験	1		56.8	50.2
			2		37.3	44.1
			3		5.3	5.7
			4		0.6	0.0
		学級のまとまり	1		52.0	54.5
			2		42.1	40.7
			3		5.6	4.6
			4		0.3	0.2
		安全や健康	1		71.7	71.3
			2		27.6	27.7
			3		0.7	1.0
			4		0.0	0.0

質問項目				学年別 4年	5年	6年
17	校外学習の評価	子どもの活動	1		24.7	19.3
			2		66.0	72.1
			3		9.1	8.3
			4		0.2	0.3
		企画	1		10.5	15.7
			2		82.6	78.1
			3		6.8	6.0
			4		0.1	0.2
		宿泊施設	1		15.0	17.9
			2		68.9	64.1
			3		15.8	17.3
			4		0.3	0.7
		意義	1		31.7	29.9
			2		65.4	65.1
			3		2.8	4.9
			4		0.1	0.1
		ねらいの達成	1		20.5	22.2
			2		73.3	72.7
			3		6.2	5.1
			4		0.0	0.0
		期間	1		9.6	10.0
			2		79.1	82.8
			3		10.4	7.1
			4		0.9	0.1
			1		75.3	85.0
			2		24.7	15.0
		費用	1		9.9	4.3
			2		77.2	75.3
			3		12.1	19.8
			4		0.8	0.6
			1		86.2	94.0
			2		13.8	6.0
		距離	1		7.6	3.8
			2		79.9	83.2
			3		11.4	12.5
			4		1.1	0.5
			1		81.3	89.3
			2		18.7	10.7